

表紙, 目次, 雑纂, 抄録, 雑報, 通信

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/38409">http://hdl.handle.net/2297/38409</a>

明治四十三年二月二十五日發行

# 十全會雜誌

第五十七號

全澤醫學專門學校十全會

# 十全會雜誌第五十七號目次

●故小川教授銅像寫真

## ○原著及實驗

●卵性双胎妊娠ニ併發スル急性羊水過多症ノ一例 鬼頭英

## ○雜纂

●新生藥摘錄 謙中生

## ○抄錄

●マルモレック血清ノ外科的結核應用。シケマイエル ●「コカイン」ノ靜脈内注射ニヨル全身麻酔。リツテル ●驅蠱藥トシテノ青酸々化汞。木田寅治 ●美容術的療法ニ於ケル「マグラン」。井上七郎 ●肋膜炎ノ統計的觀察 ●「スピロヘーテ、パリダ」ノ純粹培養。 ●「スピロヘーテ」ノ染色法 ●結核膜ト爾餘ノ膿トヲ鑑別スルニミルロン氏試驗ヲ以テスル所謂「ミルレル」氏法 ●中島邦輔 ●化膿性炎症ノ結核素治療。田中信六 ●再ビ化膿性炎症ノ結核素治療。田中信六 ●精神病者血液ノ一反應。ムツフ及ホルツマン ●精神病者血液ノムツフ、ホルツマン氏「コブレフ」毒反應。ヒューベル及ゼルテル

## ○學會

●精神病科談話會 ●「ヒステリー」ト云フコト。齊藤玉男 ●蠱毒ニ於ケル血清反應。田中友治 ●日本衛生學會 ●恙虫病ノ病原研究。緒方正規。石原喜久太郎 ●第三回日本醫學會 ●ドレンステン萬國衛生博覽會 ●南米國萬國衛生博覽會 ●萬國衛生及民衆學會 ●比律賓群島醫學會 ●第二回阿片會議 ●第三

## 十一回浴醫會議

## ○醫校雜報

●福岡醫科大學長の更迭 ●東京醫科大學の醫科 ●新潟醫學專門學校職員任命 ●愛知縣立醫學專門學校及同病院の發展 ●熊本醫學專門學校の新築工事 ●熊本縣立病院の擴張 ●在職十五年以上の醫育者

## ○人事

●本校卒業生の軍醫任官 ●會員の消息

## ○通信

●此歐洲旅行記。田上清貞 ●日野信次氏及松久祐馬氏通信 ●岩井尊宗氏 ●三股梅吉氏 ●佐々木信氏 ●小野澤庄桂氏 ●佐々木茂樹氏 ●久保武氏 ●神谷貞次郎氏 ●宮井勇氏

## ○內地雜報

●各所の新專業 ●學位請求論文 ●大連醫院ノ助手 ●孺氏 ●北里博士とエール大學々位 ●本年の海外留學生

## ○海外雜報

●ノーベル賞金 ●香港醫科大學設立決定 ●海外醫學者消息

## ○會告

●會費納付調書 ●會告

## ○附錄

●恩師小川勝陳先生遺簡

雜纂

新生藥摘錄 (承前)

●罌子桐「アブラキリ」

*Aleurites cordata* Miell. Arg. 大戟科 Euphorbiaceae

本邦、支那等に産し西印度其他に培養す高さ二丈餘に達する落葉樹にして花は白色淡紅暈を有す果實は球形をなし内に種子を藏す種子は壓搾すれば乾燥性脂肪油 (Tungoil) を得本邦にては是れを桐油と稱す此油は冷壓に依り得たる者は淡類黄色を呈し時を経るに従ひ不快臭を放ち又日光に觸るれば凝固するに至る本油は毒性を有するを以て食用に供するを得ず紙類其他の塗布に用ひ又漆と混し塗料となし支那に於ては燈油として用ふ

*A. moluccana* Willd. は熱帯及亞熱帶地方に培養し又殊に「ブラジル」に於て多く栽培する喬木にして高さ九乃至十二メートルにて葉は大きく花は小にして白色を呈し果實は阿列布綠色をなし二房よりあり各房中には骨質様の堅殻を被る種子を藏す本種子中には二十二、六「プロセメント」の鑛素含有物質及六、八「プロセメント」の無鑛素物質並に六十二「プロセメント」の脂肪油 (Bantolol) を含有す而して本油は乾燥性油なるを以て畫術 Malerei 等に用ふ又醫藥には瀉下藥 Abführmittel となす

●水澤瀉「サジオモダカ」

*Alisma Plantago* L. 澤瀉科 Alismaceae

両半球の温帶地方に産する水草にして葉は二、三尺に至り葉は長き葉柄を具へ卵鉞針形をなし花は圓錐狀をなす本植物の新鮮なるものは辛烈なる液汁を含有す故に以前より藥用に供せられたり近來は恐水病 Wasserscheu に賞用せらる又亞米利加に於ては鳴尾蛇 Klapperschlange の毒に對し解毒藥 Gegengift として用ふ

●ブタクサ

*Ambrosia artemisiifolia* L. 菊科 Compositae

亞米利加に擴布する草本植物にして無晶形の苦味素を含有す解熱劑 Fiebermittel 及驅蟲劑 Wurmmittel となし亦止血劑 blutstillendes Mittel として用ふ

●ルリハコヘ

*Anagallis arvensis* L. 櫻草科 Primulaceae

亞細亞、歐羅巴及亞弗利加に擴布する草本植物にして花は赤色又は青色をなす其草の有効成分は白色無晶形の物質として製出せらるる一醱酵素 Ferment として Polygalastärke 及 Saponin など二種の醱糖体を含む昔時癲癩 Epilepsie 癩麻質斯、水腫病 Wassersucht 等に使用せり又近時肉芽發生 Fleischwunden、乳嘴、Wazze 等を消滅する効力ある事を認めり本草即ち Herba Anagallis は花を帶ふる者にして新鮮なるもの莖に乾燥せるもの (浸劑として) は下腹痛 Unterleibsrankheit に用ひ又狂犬病 Hundswut に賞用す

●鳳梨「アナナス」

*Ananas sativus* Lindl. 鳳梨科 Bromeliaceae

西印度及中央亞米利加に産し熱帯各地にも培養す又本邦にては小笠原嶋、

(抄録)

臺灣、琉球等に繁殖する越年性植物にして大なる常緑葉を有し花は多数密生し果實 Fructus Ananassae は畧松、毬状をなし其頂上を叢生す其重さ四「キログラム」に至る培養せる果實は種子を含有せず故に食用に賞用せらる成分として林酸、アピシチン、拘攣酸、Zitronensäure 及多量の砂糖を含有し芳香は Buttersäure—Äthyläther あり而して此果實は美味を有し肉纖維を溶解し且つ蛋白質を百弗頓化せしむる特性あり此作用を有する該果實中の醱酵素 Ferment は「ネトロイト」Detroit に於ける食物會社に於て特許を以て製造す Peckolt 氏に依れば果實中には「アルカロイド」ある Bromelin を含有せりと云ふ而して未熟果實は利尿薬 Dimethikon として用ふ、其他本植物の葉より得たる纖維は織物、紙類等の原料に供す

● 椴木「アセボノキ」

Andromeda japonica Thunb. 石南科 Ericaceae

本邦及支那に産する常緑樹にして又賞観植物として培養す葉は狭長にして邊緣に鋸齒あり早春白色の花を開く本植物は古來有毒植物として知られたる者にして馬を麻酔せしむるを以て馬酔木と稱せり其有毒成分は一の糖原質にして Eykman 氏は之れを Asbutoxin と名づけ又 Jungé 氏は之れを Andromedotoxin と稱せり本植物の葉の煎汁は殺蟲藥となす

● セメシヤクナゲ「ニツクワウンヤクナゲ」

Andromeda polifolia L. 石南科 Ericaceae

本邦にも産し常緑性の小灌木をなし葉は線鋸齒形にして尖端を有し裏面には類青白色の蠟液を具ひ花は帯紅白色なり本葉は北亞米利加に於て苦味藥 Bittermittel として用の又 Folia Kosmarini の製造に供用せらるゝ事あり

(未完)

抄録

● マルモレック血清ノ外科的結核應用

Dr. E. W. Sliemeier (Arnhem)

Sonnenburg が其首席助手 Hellen をしてマルモレック血清を外科的結核に顯著の効力あることを報告せしめてより二歳を過ぎたり、以來余は文献を渉獵して七十例の此種の實驗報告を見しが中に Sonnenburg, Hoffa, Monod 等の報告もあり大体に於て頗る好成績なり

吾人が本血清の効力を論ぜんとするに當りて特に慎重なる注意を要するは血清應用後に得たる輕快乃至治癒が果して血清の効ふりや將た自然の良能なりやを判斷するにあり、故に余は本血清療法を施して効果ありと認む可き者は次の條件に適合するものに限る

- 一、短かくも半歳以上本病院に在りて多くは他の種々の療法を受けたるもの
- 二、此半歳以上の間適當の所置を受け而かも病勢依然減退せざるか若くば却て増悪せるもの
- 三、血清治療中は食物其他必ず治療前と全一状態に置くこと並に血清治療中は決して他の療法を施さざること
- 四、成績顯著にして治療後永く再發せざるもの

余が治療せる患者中此條件に適するもの十七名 其中三名は成人にして皮下注射法を用ひ残り十四名は浣腸法を採れり、皮下注射は毎日三回一回五立

仙さし流勝は五乃至十立仙毎日之行へり、不快の血清反應及發疹は一回も之を見ず、只一回注射局部の發赤浮腫を見たり、流賜には元より發疹等を見ず、唯だ第十號患者は極めて重症の腰椎結核にして終に澱粉様變性を發して斃れたり、蓋しマルモレットク血清も斯かる末期の患者には効顯ふきを證せるものあり

然れども血清療法初期殊に皮下注射に限り局所的反應を現はすこと稀ならず、但しこの反應は決して病勢を不良ならしめず例之瘻口よりの膿分泌増加し時には驚く可き多量を出すが如き、又淋巴腺腫脹し疼痛を發し時としては速に軟化し開口するが如き、又關節に在りては著しく膨大し稀には新瘻口を形成するが如き是也

病 歴

第一例 甚だ頑固にして十五年間種々の療法を施して治療せざる頸腺瘻管を有する三十八年の男子、九ヶ月間血清療法を施し殆んど全治し血清療法中止後再發せるもの

既に第一回注射後頸部は一般に腫起し瘻管より膿を排泄すること夥し、第三回注射にて鎖骨と下乃潰瘍面にありし痲皮脫離し其周圍に新膿瘍を形成せり、本法閉止後十五日にして潰瘍面に上皮發生し五週間の後潰瘍は半ば上皮を破り膿腫は非常に縮少し瘻管の分泌物は漿液性となれり、二ヶ月後には潰瘍は全く癒痕を結び九ヶ月の後に二十の瘻管盡く閉塞し只だ一個のみ小口を有し少量の漿液性分泌物を出し淋巴腺腫は唯だ一個のみ僅に之を觸る、患者は食欲亢進し一般状態著しく好良となれり、余は此の時血清療法を休止せしに間もよく症状漸次増悪し閉塞せる瘻管は再び哆開し膿は腫大し始め終に五個の分泌する瘻管を有するに至れり

吾人以上の事實に依て次の説をふすを得可し即ち多數の瘻管と膿腫を有し數年來病變變化なき腺結核に於て既に血清療法開始の初期に於て一定の輕快を現はし九ヶ月後殆んど全治するに至るこゝ、併に血清療法を休止する

や否や症状増悪せるは要之一、マルモレットク血清は確に特種の治効を有す二、被動免疫の完全に成立する迄即ち病機の全癒に至る迄長期に亘りて之れを特續するを要す

第二例 二十年來多發性頸部瘻管を有せる男子、六ヶ月間本療法を施して全治せるもの

本患者に於ても注射の初期に著しく病機の増悪せるを見たりと雖も開始後十八日にして著明の輕快を見、五ヶ月後頸部は全く平癒し一の瘻管一の淋巴腺をも觸れず滿六ヶ月にして腋窩の瘻管も全く閉鎖し患者は歡喜に滿ちて治療を止むるに至れり

第三例 五個の瘻管を有せる頑固なる足跗結核(十四歳の少女)、九ヶ月間血清療法、治癒、一週三回五仙宛流賜、治療を初むるさき脛跗關節は全く強直し外翻足を呈し瀰蔓性に腫起し疼痛あり、外側に四個の瘻孔を有し何れも壞疽性痲皮を被る内側に一瘻孔あり分泌物多し、左上膊に腺病性潰瘍を有す、開始後四週間にして輕快するを見たり、潰瘍は周圍に清潔なる肉芽面を現はし二ヶ月半にして全く上皮を以て被はる、八ヶ月にして瘻管は全部閉塞し膿腫疼痛は全く消失し足は元より強直に陥り輕き外翻足を呈す、血清療法を止め「ギプス」繃帯を附して退院せしむ、二三ヶ月を経て再び足部に小なる肉芽性創面を發せり少量の分泌物あり

第四例 十歳の童子、二個の瘻孔を有する肘關節結核血清療法五ヶ月、治癒退院、灌腸法

第五例 第一腰椎結核、一瘻管を有す、血清療法七ヶ月假性治癒、血清療法中止後再發、毎日五立仙灌腸

第六例 六十四歳の男子、稍重症の副腎丸結核、血清灌腸五ヶ月、全治開始後五週にして著効あり即ち提帶帯を用ひず勞働するも疼痛全くふし、二ヶ月後副腎は其大さ半を減じ皮膚さ遊離し、纖維様硬度、輸精管は小指大となり疼痛ふし、五ヶ月後輸精管尙稍ややく副腎亦多少大、硬共に自發

痛ふし

第七例 二年來右頸下部に多數の膿腫を有する十歳の少女、血清療法四ヶ月の後殆んど全治す、毎日五立仙灌腸

第八例 重症の肘關節並に足跗結核、血清療法九ヶ月著明の輕快ふし

十歳の男子一回五立仙一週三回皮下注射をふし一週の後肘關節は著しく腫起し周圍二・五仙米、疼痛増劇し膿分泌益々甚しく体温毎夕三八・五、足部反應に異常ふし、越へて三日を經足部は著しく腫脹し浮腫を例せる皮膚はギアス帶の間より突出し瘰孔よりは再び分泌甚しく患者は疼痛の爲め號泣す体温三九、尙皮下注射を續行す、反應漸次退行し二三日を經て体温下降し腫脹疼痛全く消失、次で膿分泌著しく減少し漿液性とふり多少の輕快を見たれども以來症狀依然乃ち血清療法を歇む、全身狀態は著しく良好さふる、瘻管も亦二三閉塞せり、然るに關節炎尙改善の域に達せず

第九例 四十歳の男子重症結核並に肘關節結核、血清療法三ヶ月効力ふし、毎日五立仙灌腸

第十例 十二歳の童子、瘻管を有する重症脊椎結核、治療三ヶ月死亡、最初二三回皮下注射、後毎日五立仙灌腸

本例に於ては治療の初に於て稍良好の傾向ありしも後急速に増悪せるの影響を以て血清の爲めさらざるやを疑ひ之を中止せしも輒廻する所なし、急性の増悪に際しては血清を應用するも何等効さきを知る

第十一例 十二歳の童子、二個の瘻管を有する頑固なる股關節炎、七ヶ月間の血清療法何等の影響ふし

第十二例 六歳の兒一瘻管を有する頑固なる肩胛關節結核、血清を用ふる八ヶ月にして治癒せず

第十三例 三十六歳左腕骨結核、血清療法八ヶ月にして著しく輕快す  
二ヶ月後初めて輕快現はる、六ヶ月後には關節は掌彎強直を呈し尙ほ稍や厚く疼痛波動なく皮膚色通常、尺骨端に極めて小なる膿瘍を殘す、食慾及

全身狀態著しく良好、其後二ヶ月に亘り血清を持續せるも變化ふし

第十四例 三十四歳の女子、脊椎結核、腰筋膿瘍、血清療法四ヶ月にして著明の輕快

第十五例 十二歳の少女、三年來頸部に潰瘍性淋頸膿腫を有するもの血清七ヶ月にて非常に輕快す

第十六例 童十四歳、數年を経たる頸腺結核、血清五ヶ月にして輕快

第十七例 男子三十四歳、頑固なる頸腺結核、血清七ヶ月輕快著明  
終に余は一言せんに爾來治癒退院ある語は臨床的意義に於て用ひらる、然らば本血清を以て全身の結核菌を全部排除し得るや、曰く然り、蓋し容易ならず、余は臨床的治癒をふせる患者に就てビルケツト氏反應を檢せる陽性の成績を得たり、依りて惟ふにマルモレット氏血清を使用せんものは長時期に亘りて之を持續せざる可からず

又余は斷ず、皮下注射法は灌腸法よりも奏効迅速にして且確實也、皮下注射に於ては屬々初期に於て一定の反應を見而して一定の輕快之に腫て來るを見る、灌腸法を以て斯る輕快を見るには快る長時日を要し進拂亦緩ふるを以て已に著しく輕快せるか若くは稀なりと雖も不快の血清症狀を惹起せるときは灌腸法を試むるも可也

余は本療法を試むるに當り患者を撰ぶと頗る嚴密にして數年間若くは十數年間種々の療法も寸効ふかりしものに限るを知る、然して其輕快を始むるは必ず二ヶ月以内に在りき、爰に於て余は本血清の非常なる成功を認む、  
(Medizinische Klinik, No. 28, 1909)

附 マルモレット氏實驗

マルモレット血清に就て Monod の前回の報告(一九〇七)以來佛國及外國に於て本血清實驗例の公表されたるもの四十三例あり合計千三百七十九例さふる、之を總括するに内科的結核にて六十五%、外科的結核病にて七十二%は長經過を取りしものに屬す、血清の無危險なるは一人の異存者ふし、

多くの對結核藥中本血清の如く多數の輕快者若くは一定の全治者を出せるものあるがし、故に佛國內には元より廣く外國に於ても本血清を盛に試みることを希望す云々 (有馬瀨吉氏譯文抄録)

●「コカイン」の靜脈内注射による全身麻酔

Dr. Carl Ritter.

余や龔きに腹腔に於ける知覺狀態を研究し彼のメルツェル及びカストが稱道せる「腹腔臟器は著名なる疼痛感有す」とふ意見に一致するものあるども阿氏が行へる腹壁の浸潤麻酔法によりて開腹術を行ひ得るを稱する説には賛成し得ず、余が實驗に依れば矢張り腹壁の局所麻酔は其局所に留まり決して腹腔内臟器に麻酔作用を及ぼす能はざるが如し

余は嘗て開腹術の際腸間膜血管を結紮せしに動物は疼痛を感じたるを以て腸間膜に浸潤麻酔を施し後腸間膜血管を結紮せしに疼痛を感じざりき、尙多く浸潤を施こせしに動物は腹腔に於て疼痛を感じざるのみならず皮膚に於ても無疼痛なることを實驗せり、又其際より注視せしに注射針の先端が靜脈内に入り居るを實驗せり、次に又之と全様の事實を實驗せり、即ち其は腸間膜靜脈に「コカイン」を注射したる時あり、此等の實驗より全は局射に注射することに依り全身麻酔を起し得ることを信するに至れり

余其事實を確實にせんと欲し犬を捕獸器に固定し其靜脈に「コカイン」溶液を注射せり、其小犬にありては1%の溶液一〇瓦斯大なる犬にては三乃至5%のもの五瓦斯にて足れり

既に注射の間に於て動物は非常に安靜となり固定せざる場合は暫くして横はり次で筋内弛緩を起す、こは尤も固有の現象にして其他屬々放尿及び嘔閉を起し前に吼ひつゝありし犬は全く音聲を止むに至る、但し其際睡眠狀態に陥ることなく動物は常に自個の注意を周圍のものに及し眼を動し頭部

を諸方に運動せしむ、目は開き之に刺戟を與ふるや反應して瞳孔散大す、但し他の運動は全く停止し呼吸は安靜平等とある、疼痛は注射後二三分間にして全く消失を來たし「ペアン」を以て挿みたるも反應せず又燒灼器を皮膚に觸れたるも何等の反應を見ざりき、即ち燒灼器にて腹部皮膚、陰莖、陰部、肛門、尾部、乳房部、頰部、顔面、耳、口腔粘膜其他に燒灼創面を作りしも尙ほ安靜に横はる呼吸は少しの障害もふく之を持續したり、只舌は之を「ペアン」にて挿したるに不快なる動作をなせしも疼痛感は見ざりき、又麻酔前に置きたる創面の如きも麻酔後には無疼痛となり血管及び神經の結紮に際し疼痛を感じざりき

麻酔狀態は短きは十五分通常は三十分以上あるを見たり其時期を過ぐれば動物は通態に恢復したり、又「コカイン」溶液の弱きものによりては其麻酔狀態を明かに知り得可し即觸覺は之を感じずるも疼痛感せずして「ペアン」にて挿むも初め反應を呈し強く破碎するに及び反應なきが如し

強き量を注射する時は臭覺消失を現はす而して其試驗動物は一も死亡せず只一二に於て其醒覺後不愉快なる副作用を實驗せり、蓋し其は小動物に多量を注射したる場合に於て動物は不安となり頭部を迅速に諸方に運動し足を解くや左右に曲走し注射後三十分乃至一時間にして動物は再び安靜となり通常の狀態に復す、而して規則的癡癡狀態は之を實驗せざりき、又再度の注射は其麻酔作用を薄弱ならしむることを實驗せり、爰に於てか本麻酔を人間に應用し著明なる効果を見るは近きに有る可し、不愉快なる副作用を防がんが爲めにはクラツプ氏の縮小循環系應用法あるを以て爾後の研究報告は他日に譲る、(佐藤悳期氏譯文抄録)

●驅微藥としての青酸々化汞

木田寅治

著者は爾來驅微の目的に應用し來りし撒里失爾酸水銀及び昇汞食鹽水等の



注射後往々不快なる副症状を合併するの弊を患ひ汞劑を無痛に注射し得る方法に付腐心せる結果ヒルシュ氏の青酸々化汞を硼酸水に溶解し之に「アコイン」を加へ溶解性注射液さふし無痛に注射し得るとを報告せるに基き吉原病院に於て五十餘例を實驗し其効を確實にせり氏の法によれば、青酸々化汞一、〇アコイン〇、五を二％硼酸水一〇〇、〇に溶解したる者毎日一筒乃至一筒半宛若くは青酸々化汞を二％とさし隔日一筒宛て試みしに無痛にして唯二例のみ注射後廿四時間可ふりの疼痛を訴へたるのみ副作用としては唯二人に急性腸「カタル」、頭痛、眩暈、全身倦怠、食慾不振、等を認め口内干保、結膜充血、頸部緊張の感ありたるのみ、且つ結論して曰く一、溶解性水銀として昇汞の代用品として用ゐる疼痛少く加ふるに昇汞の如く局處に石灰沈着を來さず硬結作用の傾向僅微なり、隨て吸收容易なるが故に其効力少くとも昇汞に劣らざる者の如し、二、他の溶解性水銀と同じく速に体外に排出され撤汞の如く後作用に乏し、三、注射針を腐蝕するの憂ふし、四、以上理由により神經性及至虛弱なる患者婦人小兒等に適當なり、唯再發を起し易き傾きあるにより青酸々化汞のみを以て終始一貫するの勇氣なく寧ろ撤汞と肘を異にし相併用するの最も便利なるを信ず、五、青酸化深は比較的廉なれども「アコイン」は廉ならざるの憾あり。

●美容術的療法に於ける

「マクラニン」

美容的療法に於ける「マクラニン」の價値に就て京都大學井上七郎氏は結論して曰く、「マクラニン」は塗布するに便にして就中汎發性のもの殊に表皮性のものに最も理想的とす、例之色素母斑の如し、もし深在性の時は一日一回宛行ふよりも一時的に行ふを可きとす、又血素の深在性ある時は多少の癩癩を顧みず充分に腐蝕せざれば無効に歸入、而して「クロイド」の素因ありや否やを注意す可し（「クロイド」ある部は硬き爲め腐蝕の進行意の如く

からず又深く腐蝕すれば癩癩「クロイド」を生ずる恐あり）、廣域のものには時を選さず續いて他部へ順次行ひ行くを良とす、淺在性点状のものには塗布面倒にして周圍の健康部をも犯すことあるを以て硝酸より劣り、深在性又は淺在性線状のものには電氣燒灼又は烙白金よりも劣る、酒渣鼻に於ては全然無効にあらざる可きも餘り適當せず反つて「イロチオール」劑優る、文身に於ては汎發性のものには他法に優れさも線状及び点状のものは電氣燒灼又は烙白金より劣る、疣贅に對しては軟かきものには他法に優る、然れども硬きものには多大の時間を要するを以て小なるものには硝酸大ふるものには刀を及ぶ限り加へ殘る所の其低を腐蝕するを良とす

●肋膜炎の統計的觀察

臺北醫院に於ける明治三十七年至同四十四年即ち五ヶ年間の 腹膜炎患者に就て丸山氏は其統計的觀察を爲せり

- 一、肋膜炎發生時期と季節との關係 六、七、八の三ヶ月に於て最も多數を占め十二、一、二の月に於て尤も少ふし
- 二、肋膜炎患者數と他の呼吸器患者數とは各年度に於て略相一致するの正比を見たり
- 三、男女との關係 職業との關係、年齢との關係に就ては概れ先人の定説に一致す

- 四、患側の比は右側五六・二三％、左側四〇・四七％、兩側三・三％を得たり
- 五、豫後を卜する上に於て熱型 熱の持續日數並に乾温両性に依りて稍推定を下し得可し

●「スピロヘーテ、バルリダ」の純粹培養

シヤウナン、ホフマン二氏が發見したる梅毒病原體は學者の種々苦心した

る結果純粹培養を成功して現に盛に行はれつゝあり、培養基は馬の血清に「ブイヨン」を加へたるものにして四十度の温度に於て保存するときは培養基底に集落を現はし來る。

●「スピロヘーテ」の染色

これ亦學者の等しく苦心したる所なるが偶然にも極めて簡單極まる方法にて染色するを得たり、即ち日本に於て用ゆる墨汁を用ゆるより、今病原含有物を「テツキグラス」に採り之に丁寧に摺つたる墨汁を加へ攪拌して鏡下に見る時は「スパルリダ」のみ染色せず明認し得る也、故にこは寧ろ病原體を除きたる部分の染色によりて病原體を明に認知さるゝ法あり。

因に從來「スパルリダ」は動物に移植すること中々困難にして只漸く狸々の一種のみに成功せしが歐洲にて於ては何れの猿にも成功して猿屬の種類を撰ぶ必要ふしと唱へり（北里博士洋行土産談の一節）

●結核膿と爾餘の膿とを鑑別するに

ミルロン氏試験を以てする一所謂

ミルレル氏法に就て

中島邦輔

著者の結核膿と爾餘の膿とを鑑別する所謂ミルレル氏法に就て、其研究の結果を左の如く報告したり

所謂ミルレル氏法は、小磁皿にミルロン氏水銀溶液を充たし、純結核膿一二滴を滴下するときは、直に硬き圓板を形成し、溶液は着色することに反して、他の球菌性膿に在りては、破壊し易き圓板を形成し、溶液は著し

く赤變すと云ふに在り、ミ氏は之を説明して曰く、結核性の膿は蛋白質消化醱酵素に乏しきを以て、ミルロン氏銀溶液にて凝固し易き蛋白質を多く含有し、硬き圓板を形成するも、球菌性膿は蛋白質消化醱酵素に富むが爲め、蛋白質を消化して、之れが可溶性分臍産物を多く含むを以て、試薬中に硬き膜を形成し難し、溶液の赤變は芳香體の存在に由るありと、而して著者は此方法を復試せしに、純結核膿に毎に硬き皮膜を形成し溶液を着色せず、然れども球菌性膿に在りても、時として硬き皮膜を形成し、且つ溶液を着色せざることもあり、沃度「ホルムグレイセリン」注入後のものに在ては、破壊し易き皮膜を形成することあり、要するに、本試験法は鏡檢的細菌検査に連なき實地家が之を參考の一助とあさば可からん而已と

（府立京都醫學專門學校々友會雜誌第四八號）

●化膿性炎症の結核素治療 Antituberculosebehandlung

entzündung に就て

東京醫科大學佐藤外科 醫學士 田中 信 六

ミルレル、バイセル、Miller u. Peiser、二氏は、昨年七月「化膿性菌瘻治療の新着眼點」を題し、頗る囑目に値する論文を公にせり、その主眼左の如し、(Neue Gesichtspunkt b. d. Behandlung eitriger Prozesse. Münch. med. W. No. 17, 1908)

各種の膿汁中に含有せらるゝ分葉核白血球は、蛋白質を分解するの作用を存し、こは該白血球中に含まるゝ一種の醱酵素に歸す可く、一定の蛋白質上に膿汁を点滴し、一定時間加温することにより、蛋白質一部の融解せらるゝ状態を長く觀察することを得可し、然して如上の作用は、實驗上唯だ結核性膿汁ならざる他の者に於てのみ之を見るを得、蓋し純結核性膿中にはこの現象の主動者たる醱酵素を存する分葉核白血球を含有することあり

れば也、以上の現象は實に近時ミユルレル、ヨツホマン二氏によりて結核性膿(冷膿)と、普通化膿菌に由る者(熱膿)との鑑別上に應用せられたる所のものとさふす

更に之を臨床上の所見に照すに、結核性病變の進撃が一般に勢ひ緩慢なるは、蛋白質融解作用を有せざるに因り、非結核性化膿性病變の進行の激烈なるは、之れありて組織を破壊するの至大なるに由る

一方には亦た人若くは動物の血清若くは病的排泄物(例之胸腹腔の滲出液)中には、全然如上の醗酵素或は單に拮抗素 Antitoxin と稱すべきものを存す

叙上の事實は轉じて之を一般化膿性病變の治療上に利用し得可きものとす、更言すれば、結核性膿は之に醗酵素を加ふることに依りて、以て容易に吸收せられ得可きものに變化せしめられ、非結核性膿は之に拮抗素を加ふることによりて、その猛烈なる吸收作用及び組織融解作用を妨ぐることを得可き也、彼の從來に汎用せられたる所の膿瘍竈に對する沃度仿謨偏里設林注入の如き、將たビール氏鬱血療法の如き、彼れは其「ヘモタキス」に於ける醗酵素の遊離を利用し、之れは血中の拮抗素を善用せるものにして、俱に間接的の醗酵素若くは拮抗素療法を以て目す可き者也

バイセル氏は、如上の方法を多數例に試み、凡ての場合に在りて(一)化膿の即時減退すること(二)病竈の分界及び傷面清淨の急速なること、並に(三)體溫の直に下降するを見ざるふしと確言せり

著者田中氏は本編に於て進んで拮抗素含有の液體(人血清動物、血清並に胸腔及び腹腔穿刺液)施術の方法、其適當症等につきて詳述し、液中の拮抗素含量はその蛋白質量に準據すべきを以て、之が定量は以て彼の多寡をトするに足るをなし、猶ほバイセル氏報告中の數症例を抜きて、以て該療法の効果を示したる後に、自家の二實驗を記せり

一は二十五歳の男子、創傷の化膿せる者にして、之には該患者中肘靜脈よ

り得たる血清を試み、他は十歳の少女、頤下部淋巴腺化膿を存するものにして、之れには陰囊水腫を材料として施し、共に頗る好良の結果を收め得、その各病歴を細記し、終りに左の言を以て、本療法を謳歌せり

該療法は、單り外科と云へる狭き専門範圍に、その應用を局限せられたる者にあらず、理論上より他の専門分科例之化膿性病變、各副鼻腔の滲膿症及び内外耳の化膿症の如き、その最も切實なる適應症たるべく、其他漿液膜腔の炎症、關節の化膿、腦脊髓膜腔にも之を應用して不可なく、將た内科的疾患特に肺膿瘍等に對する拮抗素液の吸入の如き、蓋し將來の研究に値するものと謂へし

近クホルト H. Holt 氏は、健康人血清を治療上に應用して其有効なることを述べたり、即ち之を皮膚瘡瘍に外用し、或は胃腸管内の潰瘍に内服せしめて收効したる也、これに對しては縱令ウヰーンス、Tiers 氏の反對ありとは雖、拮抗素液は後日亦た内服劑としても、その用途を開拓すべきやも未だ知るべからざる也云々 (醫事新聞第七五號)

●再び化膿性炎症の拮抗素治療に就て

醫學士 田中 信 六

これ前項論文の續稿也、始め先づ本療法に要する拮抗素血清に關して、人血清、動物血清及び胸腔穿刺液の三者を對比し、就中その最も好適なるは、豫め拮抗素の反復注射によりて其防止力 Hemmungs kraft od. that. を充めたる所の動物血清をりさふし、次に拮抗素液中の拮抗素含量測定として用ゆる「ミユルレル、ヨツホマン」氏の血清板法、同上マルクス氏變法、「カゼイン、トリプシン」法を列擧し、著者は其最後の法を推奨せり次に、本症の利長を擧げて、婦女小兒にも善く行へ得可きこと、治療日數を短縮し得ること、更縮時に於る痛苦をからしむること、加之美容上の關

際乃至機能の保存上、本療法は刻下急性化膿性炎症に對する幾多治療中、遂に其最も卓絶のものさふし、猶ほ這般の好結果は、固より拮抗素の良否、適應症の採擇、施術の當否等、あらゆる條件の繋りて其成績に存するが故に、之を臨牀に應用せんとする者の注意を要する所は如上の諸點ふりご言ひ、自家十二症例の病歴を叙し、審かに其適否及び結果を擧示し、最後に本療法の應用範圍につきて言をふし、以て本編を結べり

(同上第七八八)

●精神病者血液の一反應

Much und Holzmann  
Munch. med. W. No. 20, 1909

抑鬱狂及び早發癡病患者血清は「コブラ」性毒の血球溶解を妨止す「コブラ」性毒〇・二を蒸餾水一〇に溶解し之に同容量の「グリセリン」を加ひたるものを某液さふし患者血清〇・三五に「コブラ」毒溶液五千倍のもの〇・二五を混和し之に洗滌入血球一〇%のもの〇・五を注加す試験管を始め二時間孵卵器内に次で二十二時間氷室内に置き時々振盪す此の如くして血球溶解の全く停止せるを陽性反應とふす此際不全溶解をも陰性さふす其多數の試験成績を概括すれば次の如し

鬱憂狂及早發癡狂患者血中には他の精神病者及他病者並に健者に存せざる一物質ありて存す而て該物質たる極めて少量にして僅に生物學的に證明すべきのみ其「コレステアリン」に基くや未だ詳ならず

此反應は當時毫も病徴さきも本病の素因ある家族者に來る從來試験によれば上記二病者の一〇〇%は陽性なり之により豫後を決すべからず此等は之を精神病反應と名けたり

●精神病者血液のムツフ、ホルツマン氏「コブラ」毒反應に就て

Huber und Selzer  
Deutsche med. W. No. 27, 1909.

著者等は八十二例に就てムツフ、ホルツマン氏反應を檢せり其成績は

鬱憂狂	二十七	陽性十二	陰性七	？八
早發癡狂	二十四	十	五	九
癲癇	二	一	一	〇
對照諸病	二十九	二十一	四	四

要するに氏等の「コブラ」反應は擧示せられたる二病種のみならず他精神病性症及器質的腦脊髓疾患にも見はるゝものにして殊に鬱憂狂早發癡病にありても五十%に達せざりしなり

\* \* \* \* \*

學 會

精神病科談話會

●「ヒステリー」と謂ふこと

醫學士 齋藤 玉男

世上の醫士動もすれば本體不明なる神經症狀は擧げてこれを「ヒステリー」

の區域内に葬り去らんとするにあり、「ヒステリー」は果してしかく本態不明の疾病ふるべきが、「ヒステリー」なる語は「ヒステロン」なる希語より轉化し來れるものにして「ヒステロン」は、子宮の意あり、「ヒステリー」の語の世に行はれたるは、已に紀元前四五百年のころにして、當時の考にては、子宮が、小兒を熟望するの極、野獸の如く體中を荒れ廻るさふせり

西曆一六五〇年に及びてカロールスピツ氏、男子にも「ヒステリー」の現はるゝことを唱道せり、「ヒポコンドリ」を云ふ名稱は、紀元一六〇年、ガレヌス氏の時代より始まり、一六八一年の頃に至りて、男子の「ヒステリー」を「ヒポコンドリ」と名づるやうになりぬ

その後、「ヒステリー」は、一時全くなきものと見做され「ヒポコンドリ」のみ存するものと考へられたる時代もありたれど結局現今にては「ヒポコンドリ」は特立せる疾病にはあらず、只一つの症候に過ぎず、主として、精神病者又は神經系統の疾病に現はるゝ症候ありと云ふに歸せり

一八七〇年に及び米國のバード氏が「ノイラスチニー」なる疾病あることを主張し、一八七二年に至りて、コルテス氏は、刺戟性源弱なる語を稱するに至れり

かくて、「ヒステリー」を「ヒポコンドリ」とは、頗る複雑なる關場さふり、今日にありても、兩者の關係は、明瞭からず

一八七六年、佛國のシャルコー氏は、「ヒステリー」に就ての大著を公にしたるが、同氏の說によれば、この疾病は、體中のある部分の知覺脱失を伴ひ、この知覺脱失は、必ずしも、神經の分佈に關せず、其中には、一種の球狀のもの現はれて、これが漸次上昇す、眼は、突然視力を失ひ、知覺も脱失し、歩行、停立不能、痙攣突發的熱作用あり、その他精神にも症狀現はれ、瑣々たる事も大事に考へ、さては、強迫觀念、刺戟性、不眠等あり、「ヒステリー」發作あれば、初め不安とあり、次で感情性、次で、失神、強直、角弓反張あり。かくして一定時の後は醒覺し、不安、疲勞狀を呈す

るに至る

要するに「ヒステリー」の固有症狀は、これを確言すること能はずシャルコー氏は、一八七四年「ヒステリー」病型なるものを擧げて、これを主張したるが、この説は、獨逸にては、ストリウムベル氏の賛同する所さふりたり、然るに近年に至りては「ヒステリー」は、一定の固有なる疾病にあらずと認むるものも出でたり

但し今日にありては、「ヒステリー」の定義を斷定せんことを、誠に困難なりと雖も實際上にはその存在を認むる方便よろし一八四八年、アイゼンマン氏は、主張して曰く、「ヒステリー」は、神經系統が、過度の刺戟反應性を呈したるものありと、その外又説をふすものあり、曰く「ヒステリー」は、種々の病型を以て發現する所の全身病ありと云ひ、メイビウス氏は「ヒステリー」とは、觀念によりて起されたる身體の病的症狀を稱す云ひ、一九〇四年ヘルバハ氏は、感動と表出との間の精神學的平均不平均あるものを「ヒステリー」と云ふと説けり、又クレペリン氏は、「ヒステリー」は、精神現象の身體症狀として現はること早きを以て特徴とすといふハッチナル氏は、「ヒステリー」はすべて精神病ありと云へり

要するに實際上にはこの症を存在せしめて且つ不明なる神經症狀をすべてこれに據せざるやうしたきものあり

●微毒に於ける血清反應

醫學博士 田中友治

- (一) 凝集反應
- (二) 沈澱作用
- (三) 補體轉向作用

或動物を或菌を以て所置するとき、その動物の血清内には免疫體を生じ、菌を溶解する作用を有す、これと同時に凝集素と「オプトニン」を生ず、又菌を以て處置したる動物の血清に同名菌の「アियोン」培養濾過液を加ふる時は沈澱を見る、これその血清中には沈澱素生じたるに因るあり、又或細胞を以て動物を處置すればその血清内には血球を破壊する作用を有する物質を生ず

凝集反應

細菌を以て、動物體を處置すると云ふは、その動物を免疫性たるしむるの謂ひにして、「チーフス」免疫に用ふるには、「チーフス」菌を六十度加熱し、これを動物に注入するあり、然るときはこの動物體の血清中には「チーフス」菌を凝集せしめて、死滅せしむる作用を有する物質を生ず、これを凝集反應と云ふ

この反應を細菌診斷に應用したるは、魯のツアボロトニー及びマストラコウエツツにして、培養菌の代りに細菌患者の扁平「コンザローム」にビールの彎血吸引器にて吸引せる漿液即ち「スピロヘーテパルリダ」を多數含有せるものを用ひて、細菌患者の血清に混じたるに、「スピロヘーテ、パルリダ」にありて、凝集反應を呈するを見たり

沈澱作用

細菌の培養液を以て、動物體を處置するとき、一種の沈澱作用を起す、即ち動物の免疫血清にその同名細菌の培養濾過液を加ふるときは、一種の沈澱物を生ずるなり、この反應作用は細菌患者の血清に於て現はるゝことありとす、フオル子は沈澱元に脊髄癆及び麻痺狂患者の血清及び脊髄液を用ひこれを免疫血清にて免疫せられたる細菌患者の血清に加ふる時はその境界線に環狀の濁層を起し甚しきは沈澱を來すこと、然るにグラウスネルは細菌患者より得たる亂切血清と蒸水との混合物を細菌血清に加ふるに沈澱作用を呈す又亂切血清の代りに單に蒸餾水を加ふるも白濁を生ずる

を以て、この血清中には「クロプライン、オイグロプライン」或は假性「グロプライン」の存在することを知る

ホルゲスは細菌血清に「レチチン」溶液を加ふれば雲の如き濁濁を呈するを認めたり

エルランドは心臓筋より製したる物質「クオリン」にても同一の反應を呈することは、照内、豊田兩氏の實見せる所なり

以上の反應作用は細菌血清に全然特異ありと云ふにあらずして、陽性反應少し

今伊東飯田兩博士の報告によればホルゲス（〇・五％レチチン溶液〇・二と細菌血清〇・二を混す）法は陰性二五・七％陽性四六％クラウスチル（蒸水〇・二と細菌血清〇・二を混す）法は陰性五七・七％陽性二二％照内氏（〇・五％クオリン溶液〇・二と細菌血清〇・二を混す）法は陰性一四・三％陽性六五％、ワツサーマン補體結合作用は陰性〇陽性六九・一％にして、血清沈澱作用は補體結合作用に比しその反應劣るを見、凝集作用はミユルレンス、シエンシエウスキー等の「パルリダ」の培養と稱するものあれども、その信否未だ確實ならずして、純粹なる眞正「パルリダ」を得ること難きを以て、行はれ難し、故に現今使用せらる細菌血清診斷はリ氏補體體向作用に勝るものなきを知る

補體體向作用

ホルゲ及びゲングの二氏は免疫血清と免疫元とを混合するとき免疫血清中にある免疫體即ち抗體と結合して健康動物の血液中常に存在する所の補體を吸收するを發見せり、これを證明する爲に血球溶解作用を應用せり、該作用を補體體向作用と云ふ

補體は攝氏五十六度の熱を以て、三十分間熱すれば破壊消失するものにして、然るときは血清は非動性とありたりと云ふ、今山羊の血球を用ひて家兔を免疫するとき家兔の血清中に生じたる抗體は、免疫元と結合吸收す

を以て、この血清中には「クロプライン、オイグロプライン」或は假性「グロプライン」の存在することを知る

ホルゲスは細菌血清に「レチチン」溶液を加ふれば雲の如き濁濁を呈するを認めたり

エルランドは心臓筋より製したる物質「クオリン」にても同一の反應を呈することは、照内、豊田兩氏の實見せる所なり

以上の反應作用は細菌血清に全然特異ありと云ふにあらずして、陽性反應少し

今伊東飯田兩博士の報告によればホルゲス（〇・五％レチチン溶液〇・二と細菌血清〇・二を混す）法は陰性二五・七％陽性四六％クラウスチル（蒸水〇・二と細菌血清〇・二を混す）法は陰性五七・七％陽性二二％照内氏（〇・五％クオリン溶液〇・二と細菌血清〇・二を混す）法は陰性一四・三％陽性六五％、ワツサーマン補體結合作用は陰性〇陽性六九・一％にして、血清沈澱作用は補體結合作用に比しその反應劣るを見、凝集作用はミユルレンス、シエンシエウスキー等の「パルリダ」の培養と稱するものあれども、その信否未だ確實ならずして、純粹なる眞正「パルリダ」を得ること難きを以て、行はれ難し、故に現今使用せらる細菌血清診斷はリ氏補體體向作用に勝るものなきを知る

る作用を有するに至る。微毒患者にこの反應をワツサーマン、ブルツク、及びナイサーの三氏は應用せり。微毒を猿に植へて、その血清を非働性にしたるものを免疫血清に用ひ、補體には家兎より取りたる血清、免疫元には先天微毒にて死したる初生兒の肝臓水製成幾斯を用ふ、これは腐敗の患あるを以て一と四の比に生理的食鹽水を加ふる外に、〇・五%の割合に石炭酸を加へたり、又ランドスタイテルは「アルコホル」幾幾斯を作るには一と一〇の割合に「アルコホル」を加へ使用する際に生理的食鹽水にて五倍に稀めたり。又抗體に微毒患者の非働性にしたる血清を使用せり、補體には「モルモット」の新鮮血清を生理的食鹽水にて二十倍に稀釋したるものを用ひたり

以上の非働性免疫血清〇・二と免疫元を含有する先天微毒の初生兒肝臓幾斯稀釋液〇・二と補體ある「モルモット」血清食鹽水一・〇とを混和して、三十七度の孵卵器に一時間入れ置くときは免疫元は抗體と結合して補體を吸收す、患者の血清は非働性にせざる時は、補體を含有するものある故に注意すべし

その三液混合液に更に山羊の血清にて免疫したる家兎の血清を五十六度にて三十分間熱し非働性さしたるものを五十倍乃至百倍に稀釋したるもの適宜凡そ一・〇又別に生理的食鹽水にて十分洗ひたる山羊血球を五%の比に生理的食鹽水を加へ、乳劑さしたるもの〇・三とを加へて三十七度の孵卵器室に置くこと二時間にて反應を顯はす、その後氷室に十二時間入れて檢すべし、微毒患者の血清あらば、山羊の血球は、溶解せずして、潤濁す、非微毒患者の血清あらば、山羊の血球は「モルモット」の補體の爲に溶解して清澄するを見る

この反應を種々の時期に於ける微毒を檢査するときは次の如き反應を呈す  
土肥教授と伊東學士との報告によれば、左の如し

	ブルツク	チャトロン	ホフマン	グロツクス	伊藤
	ステアレン	ブラシニコフ	グライムンタル	フオルグ	肥藤
微毒第一期	四六・二%	六〇・〇%	五〇・〇%	四〇・〇%	四六・二%
同 第二期	六七・一%	六九・〇%	八二・〇%	六三・〇%	六三・三%
同 第三期	六六・六%	六九・〇%	八〇・〇%	六六・〇%	一〇〇・〇%
潜伏 早期	五〇・〇%	八〇・〇%	六七〇・〇%	三〇・〇%	六二・五%
潜伏 晚期	五〇・〇%	六〇・〇%	三六・〇%	三〇・〇%	

右の成績を以て見れば、初期及び晩期の潜伏梅毒にして觸診、視診、鏡檢的に微毒を判定し能はざる際に於ても、この反應にて大多數は微毒の存在を證明するを得るが如し

これ迄暗澹として數百年の歴史を繰返したりし、本病も「シャウゼン」マンと「スピロヘーテ、パリーダ」なる病原發見に續き、ワツセルマン、ナイサー、ブルツクの血清反應を發見せられ、不明の中に埋没せられたる病原も稍々闡明せらるるに至れり、今や精神病學は隆盛の域に達し、その研究も長足の進歩を來したりと雖も精神病を起す所の細胞顆粒或は細胞液の異常を來す原因は多く不明なるが如し、これ等不明の原因は或は微毒に歸するべきを保すべからず。而して微毒は人間中最も多く流行する病あるを以てワツサーマン氏補體轉向作用を精神病患者に試むるも徒勞の業にあらざるべし、

○第十一回日本衛生學會 (十二月五日)  
恙蟲病の病原研究

醫學博士 緒 方 正 規 君  
醫學士 石 原 喜 久 太 郎 君  
(石原助教登壇) 余は今年七月中旬、亦々宮路助手、古瀬副手と共に、恙





第四部(內科學)

會長醫學士 三清野 名男

第五部(外科學)

會長醫學博士 木村孝 名藏

第六部(眼科學)

會長醫學博士 河本重次 名郎

第七部(產科學、婦人科學)

會長醫學博士 濱田玄 名達

第八部(小兒科學)

會長醫學博士 弘田 名長

第九部(消化器病學)

會長醫學博士 長與 名吉

第十部(神經病學、精神病學)

會長醫學博士 今村新 名吉

第十一部(耳鼻喉科學)

會長醫學博士 岡田和一 名郎

第十二部(皮膚科、梅毒、泌尿器病學)

會長醫學博士 土肥慶 名藏

第十三部(衛生、細菌、傳染病學)

會長醫學博士 松下禎 名二

第十四部(法醫學)

會長醫學博士 片山園 名嘉

第十五部(軍陣醫學)

會長醫學博士 菊地常三 名郎

第十六部(齒科學)

會長 西村輔 名三

▲日割及場處

四月一日大阪中之島公會堂にて開會式及總集會を行ひ同夜同所にて高等醫學學校々友會の歡迎演藝會を催す。

二、三兩日は各分科會を開く、内科は公會堂外科は土佐堀青年會館、齒科は商業會議所、軍陣醫學は信行社他の十二科は凡て高等醫學學校及び附屬病院に於てし、二日夜は大阪醫會員有志の歡迎觀劇會、三日夜は各分科の懇親會あり。

四日は中之島公會堂にて總集會及び閉會式を舉げ引き大園遊會(場處未

定)を催す。

五、六、七、三日間は市内及近府縣學校病院其他の視察の豫定。  
▲總集會の演者及演題左の如し。

- 一、遺傳 醫學博士 大澤謙二
- 一、脚氣 同 青山胤通
- 一、免疫 同 北里柴三郎
- 一、遺傳 理學博士 波瀨庄三郎
- 一、日本人の血管 醫學博士 足立文太郎
- 一、藥物 藥學博士 長井長義
- 一、原蟲 醫學博士 宮入慶之助

○トレスデン萬國衛生博覽會

今年又は明年を以て獨逸サクソン王國の首都トレスデンに開かるべき同博覽會は、未だ管て見ざる大規模のものにして、嚴正なる學術的分類に準據し、(一)空氣、光、土壤、水 (二)居住及家宅 (三)榮養及飲食品 (四)衣服及身體攝生 (五)職業及勞動 (六)傳染病 (七)病者看護及災害救濟 (八)嬰兒及少年 (九)交通 (十)陸軍及海軍 (十一)熱帶地衛生 (十二)統計の十二部門に別ち、會場は同市其工費を負擔して、公園内に建設すべしといふ

○南米の萬國衛生博覽會

南米アルゼンチン共和國は本年恰かも其獨立百年に相當するを以て記念の爲め、來る五月よりホーナスエーリスに於て大博覽會を開催し、同時に萬國衛生博覽會をも併せて開催する由にて、我内務省衛生局にも出品を依頼し來れり云ふ

### ○萬國衛生及び民勢學會

第十五回學會は本年九月二十六日より合衆國華盛頓府に開催せらるゝ筈にして、わが内務省よりは或は北里博士の派遣を見るに至るやも知れず同博士もし渡米せられるゝに至らば、エール大學の聘にも應じ出演せらるべしといふ

### ○比律賓群島醫學會

同醫學會は二月同島に開會せらるゝを以て、例に由りて本邦よりも適任の斯學者を派遣參列せしむべしといふ

### ○第二回阿片會議

同會議は本年二月上海に開會の筈かりしも、更にわが臺灣に開會せんことの希望を、主催者たる米國政府より交渉ありたりとの報あれども、當局者に於ては未だ斯る公報に接せず、隨て派遣員等全く未定かりきいへり

### ○第三十一回浴醫會議

樞密顧問ブリーケルを會頭に仰ぎ、今年一月二十九日より二月一日に至る四日間、ヒューフェランド會の祝賀會と共に之を伯林に開催したり、而て出演者は其旨會の總會委員たる樞密衛生顧問ドクトルプロック（伯林北西トマジウス街二十四番）へ申込むこゝより居りたり



(醫校雜報)

## 醫校雜報

### ○福岡醫科大學長の更迭

同學長大森博士の宿痾の故を以て今回愈々其の職を辭せられたりその後任は同大學教授醫學博士後藤元之助氏に決定せり、大森博士が元の福岡縣立醫學校教師兼病院長として赴任せられてより茲に恰かも三十年、經營慘憺以て今日屹然たる九州大學の基礎を定めたるの功蹟に對し、曩に縣下の有志相謀りて博士の爲めに銅像建設の企てあり、遠からず大學構内に溫容掬すべき博士の壽像を見るべく又この程縣會にては、金三萬圓を博士に贈呈し、その功勞に酬ゆるの議を決したるが、猶ほ福岡市民は別に博士の隱退を機として、永くその德澤を記すべく、何等か市の紀念事業を起すべく、目下より協議中ありきいへり、蓋し博士の如きは眞個功成り名遂げたる者、然して徐ろに病軀を養ひつゝ、多年自から播種し培養し來りし者の花咲き實結ぶを樂しみ見むこは、今後の博士の最も希望せらるゝ所あるべし、因に後藤博士は岐阜縣の人去る明治二十七年東京醫科大學を出て同三十三年六月生理學研究として獨國に官遊し、歸來福岡醫科大學教授に任せられたる人也

### ○東京醫科大學の齒科

文部省にては東京醫科大學に齒科講習所を設くるの豫定にて來年度豫算に一萬餘圓を計上したる由なるが右は齒科醫を募集して講習制度さするか又は最初より齒科醫師を養成するかは未定ありと

○新潟醫學專門學校と職員任命 愈々本年九月より開校の豫定ある同醫學校は、初級に使用すべき講堂等の落成と共に、校長以下二三教授の任命ありて、これ等の人々は直ちに同校創立委員を命ぜられ、而して開校に關する諸般の準備を爲す筈ありと聞く。

○愛知縣立醫學專門學校及同病院の發展 同校の明治四十三年度に於ける計劃を聽くに、現在職員は廿二人、之れに新に獨逸語擔當の備外國人(月手當二百圓)の教師一人、實習指導の教員二人、合計三人の増員を爲すべく且つ實習並に備品消耗品費として二萬七千三百圓を豫算し、又新に研究料を加設し、同校卒業生申尙ほ某科の研究を志望するものを收容して二ヶ年以内の在學を許す筈あり、而して同校並に愛知病院の新築は去る四十一年度より四ヶ年の繼續事業を以て着手し、今四十三年度に於ては二十三萬六千圓、明治四十四年度に於ては三十萬圓を費して全く完成する豫定にて、敷地は未だ發表せられざるも噂の如く共進會附近に決定するからんと、次に前記各事業遂行の爲め收入豫算に於ても大改正を加へたりといふ

○熊本醫學專門學校の新築工事 同校にては縣より交付せられたる金七萬圓に金三萬圓を學校より支出し、合計十萬圓の工費を以て明治四十四年に落成を期し、熊本病院裏手に購入せる敷地に校舎の新築を開始すべく該校舎は主として解剖學、生理學、醫化學教室の全部、衛生細菌學教室、病理學教室、藥物學法醫學教室の一部并に外科臨床講義室、獨乙語學倫理學教室、事務室、生徒休憩室、圖書室等にして其建築坪數平屋建千〇三十九坪の豫定なりと云ふ

○縣立熊本病院の擴張 一昨年來特別會計さふりたる同病院にて

は、その事業の擴張に伴ふて、病棟の増設に併せて耳鼻咽喉科を開設し、猶ほ精神病者の收容をなすべく、その費用として三萬千九百餘圓を昨冬縣會に要求せしに對し、同縣會は二等病室一棟及び精神病室一棟の建築費(此金額一萬三千三百六十餘圓)を削除したる他は滿場一致にて之を可決したりといふ、因に同病院今年度歳入豫算は十一萬三千五百餘圓あり

○在職十五年以上の醫育者 醫科大學を始め、各醫學專門學校教授にして、本年にて在職滿十五年以上の醫育者は左の如し(醫海時報抄)

東京醫學		澤金		氏名		就職年月	
高安	右人	明治	廿一年三月	廿二年			
高山	基重	同	廿六年十一月	廿七年			
大澤	謙二	同	同	同	十年	卅三年	
緒方	正規	同	同	同	十八年	廿五年	
小金井	良精	同	同	同	同	同	
高橋	順太郎	同	同	同	同	同	
三浦	守治	同	同	同	二十年	廿三年	
下山	順一郎	同	同	同	同	同	
丹波	敬三	同	同	同	同	同	
青山	胤通	同	同	同	同	同	
佐藤	三吉	同	同	同	同	同	
片山	國嘉	同	同	同	廿一年	廿二年	
河本	重次郎	同	同	同	廿二年	廿一年	
弘田	長	同	同	同	同	同	
隈川	宗雄	同	同	同	廿四年	十九年	
長井	長義	同	同	同	廿六年	十七年	
山極	勝三郎	同	同	同	廿八年	十五年	
三浦	謹之助	同	同	同	廿八年	同	

子	葉	仙臺	岡	山	長	崎	大	阪	京都	愛	知							
三輪 德寬	筒井 秀二郎	山形 伸麩	菅 之芳	飯田 快太郎	高橋 金一郎	桂田 富士郎	田代 正	村上 安藏	森永 伊吉	森川 劔三郎	佐多 愛彦	櫻根 孝之進	堀見 克禮	遠藤 滿清	島村 俊一	熊谷 幸之輔	奈良 源一郎	鈴木 錠吉
明治十七年六月	同 廿二年五月	同 廿三年八月	同 廿三年九月	同 廿一年三月	同 廿六年九月	同 廿三年七月	明治十五年六月	同 廿四年十一月	同 十四年十一月	同 廿七年四月	明治廿七年三月	同 廿四年一月	同 廿五年十一月	同 十五年十月	明治廿七年十二月	明治十四年十一月	同 十四年十月	同 廿四年七月
廿五年	廿一年	廿二年	廿二年	廿一年	廿六年	廿八年	廿一年	廿九年	十六年	十六年	十六年	十九年	十八年	廿八年	十六年	廿九年	廿九年	十九年

人事

○本校卒業生の軍醫任官 明治四十二年十二月二十九日官報を以て陸軍三等軍醫に任官せられし方を擧ぐれば左の如し

- 田村圓四郎氏 森 義 作氏 柳原茂樹氏
- 鷺山謙吉氏 樋口平次氏 戸谷慈一氏
- 館 保 二氏 佐崎伊久氏 織田秀時氏
- 山田章一郎氏 岩佐兵藏氏 茂居政治氏
- 近森村主氏 村本淳吉氏 村尾純昌氏
- 松坂幸七郎氏 西村政吉氏 中谷正範氏
- 戸井源吉氏 西尾黄一氏 近藤勇記氏
- 笹田順二氏 江藤 幹氏 松尾信夫氏
- 野村 敏氏 千秋 了氏 馬淵真澄氏
- 來間隆次氏

平塚甚之助氏 (陸軍三等藥劑官に)

○本仙太郎氏。梅澤亮吉氏 敦賀病院趣任

○吉井直次氏 金城病院

○眞館修平氏 自宅開業 (十二月二十八日)

○寶達佐市氏 (四拾年度卒業) 大坂衛戍病院附三等藥劑官の同氏は今回大分衛戍病院附に轉任せられたり。

○藤井一雄氏 明治四十年卒業、内科二部醫員任務中兵役に服し

(人事)

其后再び醫員拜命せられしも其後痢里福井小濱病院に奉職せられたり也。

○大野留次氏 明治四十一年度卒業一年志願兵にて兵役に服務中満期除隊され豊橋病院に奉職さる

○久保武氏 明治三十一年本校醫學部卒業後金澤病院婦人科醫員となり東京帝國大學及び京都帝國大學解剖學教室助手となり名古屋醫專校解剖學教諭となり先年大韓醫院解剖學及病理學教諭として京城へ赴任せられしが今度韓國龍山山下町八番地の二へ轉居せられたり。

○下平用彩氏 下平教授は本年四月頃歸朝の筈ありしも歐州漫遊研學の都合上八月頃ふらては歸朝せられざる由

○田中精一氏 四十二年度卒業昨年より神奈川縣鎌倉郡鎌倉町鎌倉病院に勤務せらる

○長久開一郎氏 四十一年度卒業后宇都宮病院内科勤務中の所昨年郷里富山縣東礪波郡の自宅に於て開業せられたり

○小林進氏 四十一年度卒業の氏は昨年病氣にて故里に靜養中の所再び德島市古河病院へ出勤せらる

○佐々木茂樹氏 四十二年度卒業。同氏は卒業後歸郷中の所今春早々宇都宮市旭町渡邊病院に勤務せらる。

○高木安治氏、寺田久十郎氏 是目下富山赤十字支部病院内科醫員に山崎太一氏は眼科醫員、勤務中あり

○永井人雄氏 陸軍三等軍醫の氏は今般臺灣 聯隊附へ轉任せらる

○吉村一馬氏 今回靜岡病院醫員奉職せらる

○林京次郎氏 金澤市横安江町に於て開業せらる(藥學)

○近藤勇記氏 豫備陸軍三等軍醫の氏は樺太醫院大泊分院に勤務中氏は嘗て當校病理教室に長らく研學せられたる方あり。

○河崎正雄氏 東京順天堂病院に勤務せらるる由

○角田耕六氏 (四十二年度卒業)横濱神腦病院に勤務せらる

○西川英二氏 (四十二年度卒業)三重縣郡山郡上野町廣山醫院に勤務さる

○栢原直次郎氏 (四十二年度卒業)大日本赤十字社三重支部山田病院外科部に勤務さる

○諸角友平氏 三十一年卒業し一年志願兵に入り后宇出津(能登)に開業せられしが今回傳染病研究所へ入所大に研鑽せらるる由。

○佐々木靜氏、市川久多氏 陸軍三等軍醫の両氏は陸軍々醫學校在學中

○林秀雄氏 (三等軍醫)今回陸軍々醫學生徒を命ぜらる。

○太田得郎氏 四十一年度本校醫科卒業後金澤病院外科貳部に研學中ありしが小松勝木醫院及金澤市川北醫院に研鑽大に腕を練り今般島根縣立松江病院外科へ轉任し耳鼻咽喉科を擔任せらるる由尙ほ氏は去月華燭の典を擧げられたりと。

○中野才幸氏の不幸 海軍々醫少監たる氏の令室は永々病中の所去る一月不歸の客とあられたりと謹て哀悼の意を表す。

○長澤安弘氏の不幸 富山市開業の氏は舊臘令室を失ひ給へりと氏は昨年一大家屋に移り益々其術を施さむとするに際し丙助の賢夫人を失ひ給ひしは深く惜しむべく茲に哀悼の意を表す。

○中川幸庵氏の榮轉 明治二十八年本校醫學部を卒業し東京永樂病院内科醫局長となり元本校内科教授山根文策氏の下に永々研學せられたる今氏は今回臺灣總督府醫院醫員より花蓮港醫院長事務取扱に榮轉せられたり

通信

○北歐洲旅行記

在獨乙 田上清貞

氣候の悪い獨乙も今日のみは、日本晴れの心地好き、十月十一日の午後二時半、南獨乙のウユルツブルク市を發して北遊の途についた、此行の目的は主として學術的視察にある。

年々いて親切な宿婦は、二三のわが學友とも、予を停車場に見送つて握手固く「良い旅行をしなさい」とわが發程を禱り或は「私を忘れてはかりませぬ」など、親しくも懇篤な挨拶を交せば、學友等も亦「土産には赤毛談を澤山もつて來給へ」、「ロンドンではシルクハットの迷兒か一人出來るさうだから滑稽な其の姿が見たいものだね」などと、談はうれからうれへと談接に暇がふい、祖國を去る一萬里、われ等學友の親しみは骨肉も管ふらないのである。

流笛一聲、獨乙の流車は流笛を鳴らさぬ、車掌が日本の巡查さんの持つてるやうな小さな笛でピイ／＼と、合圖をすると同時に、流車はかたこと動き初むるのである室内には同行の水尾君と予との二人限、例もふがら獨乙の鐵道は乗心地が宜しい。

▲獨乙の流車

鐵路は廣軌ふれば客車も廣く其構造は急行と徐行車によつて異なつて居る、急行になりては、列車の首から終まで中約二尺の縦貫廊下が通じて居

るから便利ふ、こゝだ一等四人二等六人三等八人の座席を以て各一室に區分されてある、喫煙室は勿論別になつて居て、特に婦人室の設けもある、一二等の立派なのは言ふまでもふいが、是等の室に乘るものは、馬鹿か亞米利加人(贅澤を意味す)であると言ふ諺のある如く儉約な獨乙人の大抵は三等より乘らふ、これが故に三等の構造にも頗る意を用ひてあるやうだ、例令ば小さな車が据付られてあり、然してそれが自由に取はづしの出來るやうになつて居る、此の他に勞働者専用の四等室があるのは、日本では類のふいこゝだ、以上の各室内には鐵道地圖が掲げられてあつて、旅行者には至便此上もなく、或は暖房の裝置があつて、自由に室内の溫度を調節することの出來得る如き總ての點に於て開然する所がふい、之に反して佛蘭西や伊太利の流車は殆どお話にからぬ日本の流車でも伊佛のそれに比しては優れて居る、數週前のウユルツブルクの一新聞にも日本の流車にはボーイがついて居るから、乗客にさりては便利至極である、此點は獨乙が日本から學ばればならぬ、と論じて居た。

▲ゲツチンゲン市

其日の午後七時半、流車はゲツチンゲン市に着いた、出迎はれた數名の、同胞留學生の中に同縣出身の石川君を見た時は流石に嬉しかつた、君は京都醫科大學生理學の助教授、昨冬此の地に留學されたのである此夜は石川君の宿の人さふつて、麥酒を抜きながら丸出しの越中方言、四邊憚らず一夜語り明して、翌十二日は市内見物にさ出かけた、人口僅に三萬三千を有する過ぎぬ小市であるが、聯邦のいづれの都市に於ても見るが如く、上水水道の完備して居るには追いつた。

▲ゲツチンゲン大學

ゲツチンゲン市は、大學町として名高いのである、就中理科は柏林大學と並び稱せらるゝ所、數理化學攻究の日本留學生の一度は必ず此に遊ぶのを以ても之を察するに足らう、現に五名の學生が居る。

醫科も又碩學を聚めて居る、ウエルツォルン教授は一般生理學を以て獨乙第一流の學者として知られ其「ノイロン」學説は有名なものである、衛生學の教授エスマルク博士は、彼の驅血帶を發明して外科學上に一進歩を興へたエスマルクの令息で獨乙現皇帝の從弟にあたるさうだ、然も日本好きでわが留學生には種々厚意を表さるゝと言ふことだ。

眼科學はヒツピル教授で齡七十に近いが、猶豐饒たるもの、眼結核の療法につきて興味を有せらるゝさうだ、其令息ヒツピルはハルレー大學眼科教授として亦令名を有せらるゝ、其先天性畸形なる虹彩缺乏症を動物試験に徴せられた功績は、斯界の畏敬する所である、予は昨年同教授を「ハイドルの大學眼科教室に訪ひ、今又茲に其嚴父の在す當大學を訪ふたのは、言ひ知らぬ懐しい心地をした。

ゲツチンゲン大學眼科教室は、二年前の新築にかゝる白煉瓦の四層樓、輪奐宏大を極めたもので、室内の角隅を圓めたるなど注意普く行き渡つて居る、二階は教室と診察室、三階はよび四階は病室で總て七十の病床がある、獨乙病院の病室の清潔なのはいつ見ても氣持がよい、手術室の整頓せる分ても手術機械は消毒液中に保管して置くなど、ヒツピル博士獨得の法ださうだが、予は殊に目新らしく感じた。

此眼科教室に並び建てられたのは、やはり新築の病理教室である、教授カウフマンは骨の病理研究を以て世界に名高い人だ、多くの病理標本は何れも眼目の價あるが、殊に珍らしい——骨の畸形又は外傷等の標本の豊富なるには驚かざるを得ない中にも富山縣に關係のあるクロー病、骨軟化症の標本のごときは深き注意を拂つて見た。

婦人科にはルンゲ教授ありしも今夏長逝せられた、其著述の譯書は日本でも行はれて居る、此處には福岡大學の整形外科の住田助教が、研究して居る。

▲江戸子の助教

此の病理學室の助教シュルツェ君は江戸子である——其父シュルツェ教授は明治初年日本政府に招かれて、東京醫科大學で外科學の教授を擔當した人で、此間に君は赤門の官舎に於て呱呱の聲をあげた、生粹の江戸子否獨乙入である、されば君は日本人を同胞の如くに懐しがり、然して又勿論の日本最良である、予の面會した折にも自分の日本生れあることをいかに欣々然として語り、木村桂田博士とはフライブルク大學のケーゲレル先生の門下に居たので、殊に昵近の間柄だと言つて居た、年未だ三十を多く出ない有爲の青年であつた。

▲ピスマルク公の下宿

市街をはなれると、土堤の兩側には並木が茂つて居て、市民の散歩には好適の場所がある、其土堤に半かゝつて建てられた、見るからに低い汚い煉瓦造りの古い家があつてそれに丁度ライン川に臨んで横口の階段を下ると、流で洗濯の出来るやうにふつて居る、焉ぞ知らん、此の矮小な家屋こそ鐵血宰相ピスマルク公が、其廿何回かの決闘を行つたさいふ腕白時代即ち一八三二年より三三年にかけて住んで居た下宿屋である、予は往年の面影を偲ぶべく其室内を見やうと思つたが、今は革商の住宅さふつて、清い流には三枚の大きな牛皮が漂泊されてあつた。

獨乙の警察制は大學生に對しては、昔も今も全くの治外法權である、然し其餘に亂暴ふものは大學所屬の牢屋で、何日間かの禁錮を受けるのである、大學時代のピスマルク公の如きも亦牢屋の人とあつた事がある、彼は終日徒然のまゝ牢屋の石壁に自分の名を刻んだ、それも貴き記念として今日までも遺つて居る。

▲電信の發明者

今より七十五年前ゲツチンゲン大學に二大理學者があつた、ガウス博士およびウエーベル博士これである、此の両博士によりて今日の電信が發明せられた事は茲に説くの要はふからう、ガウス博士は數學のあらゆる方面

に於て幾多の新學説を提供して、現今の如き進歩せる數學の基礎を造つた學者で、殊に同博士の暗へた「多數の屈折面を有せるものも、光學的の軸が同一なれば二つの主要面によつて二つの結合點を有するものも同一也」といふ學説は、眼科屈折學上に至大の貢獻を興へて居るのであり、ウエーベール博士の物理學上に及ぼせる偉功も亦已に人の知る所である、此の偉人たる二學者のあつたのが勳機さふつて、ゲツチンゲン大學の理科大學は他の理科大學に比して嶄然頭角を現はして居る所以である、予は同市に建てられある此の二偉人の記念銅像に對して敬慶の念に堪へなかつた。

▲さてこの説

智能の主裁部は頭腦にある、故に頭蓋の形を見て其人の伶俐か否やを相し、又は言語動作によび顔象によつて相手の性質を觀破することは勿論なし得るが、最も目につき易いものはおでこである、おでこは何ぞや、前額部の異常突隆を名づけるのであるが、更に精密に之を見ると頭蓋の異常形で、獨り前額の突出のみでなく、後頭部も亦突隆して居るのである、腦水腫病はおでこの最も著しい現象ではあるが、之を患つたもの、大抵は愚鈍である、即ち水腫液の壓迫によつて、腦の細胞の發育を害はれたからであるが、之發育旺盛のため比較的異常大なる頭腦を形成し、前後は突出して中央部は稍凹ある、宛ち馬鞍に似て居るから名づけて鞍形頭蓋と稱する形の頭腦を有するものは聰明で多くは偉人である、第十九世紀學界の偉人ヘルムホルツを始めとし昨年本邦に來遊した細菌學の泰斗コッホ博士、眼科學中世期の大學者レーベル、又近世眼科學の泰斗アキセンフエルド古に逆上りては有名なる伊太利の天文學者ガレリョおよび英傑ナポレオン、本朝の源賴朝の如きは皆この鞍形頭蓋のおでこである、今カウス先生の銅像を見て、先生亦おでこであることを知り、おでこ偉人説の証左を得たやうな思ひがした。

▲日本食の響應

十二日の中食には、住田君の宿にて日本人相會して豚汁の響應を受けた、馬鈴薯あり、胡蘿蔔あり醬油で味をつけた胡瓜漬もある、御飯の焚方も、か／＼甘いものだ、箸は舶來の日本製、一同は舌鼓を打つた。そも／＼日本人は愛國心の結晶である、高き襟の苦しき或は洋袴の細き足の痺れさうふよりは、われらにさりては日本服の寛濶にして心地長き、夜は大抵日本服を用ひて居る、又時々日本食を味ふては箸もつ法を忘れまいやうに力めて居る異境にあつては一層愛國の念を高め、日本人はあくまで貴き日本人であらねばならぬ。

▲リベック市に向ふ

ゲツチンゲン市を出立したのは、十二日午後五時半にして同七時半には既にハンノーバア市を通過した、斯市は獨乙國中にて發音の最も正しいので名高い、陸軍武官の留學生は大抵此の地で語學を練習するのである、市中には日本品を模造する多くの工場があるさうだが、前途を急ぐために見物しなかつた、リウベック市へ着いたのは夜の十一時半、停車場前の「インテルナチヨナル」に泊つた、新築の旅館に入つたので快く夢を結んだ。

▲ロストツク大學

翌十三日朝六時半、ロストツク大學參觀の爲同市に向ふ、市は海岸の一小都會人口二萬を有するのみ、もさより見るべきものがあから馬車を驅つて直に大學に至る。病理學教室に教授シラルベを訪ふ、先生は畸形病理學の大家、四十歳前後の温厚篤學の士である、此教室に保存せる赤兒、腎部の腫瘍の中より生れた胎兒および腹部にて相密着せる双体兒の標本は、世界珍とするに足るものである、教授は之を持ち來つて細に其深遠な學殖を吐露せられた。

眼科はペーテルス教授にして容貌怪偉眼光鋭く一見五十四五歳でもあらか、自ら室を案内せられたが、別にはぞこ稱すべき特徴も見ない心算に第三流のものと思つて居たが、先生頻りに整頓せる且良い教室と自負せられ



たのはいさゝか異様に感じた、七十五名の患者收容の病室の外自費患者室（即ち先生の私腹を肥すもの）の満員ありとて、其病室を指して語らるゝかど餘り人格の高い先生とも思はれぬ、研究室は割合に設備が整ふて居た、眼内に入つた鐵片を除去するに用ふる磁石器の最新式にして、在來のハーブ氏磁石器に比して優れるを見る、此大學の耳鼻學教授は有名か人さ聞いた。

▲世界に珍らしき波船

ローストック市を正午半、伯林より直行流車を待つて走るこゝ四十分、ワルメムンドに着く、此處より對岸の丁抹國まで十一里の海上を、流車はわれらの乗れる其儘に、渡船に乗せられて對岸に着くや又走り出すのである、渡船の長さ六十間幅九間中甲板には軌道が敷かれてあつて、客車は縦に中央二列に、貨車は其傍に、さらべられる、更に其兩側は三等客用の休息室にあつて居る、上中等の客のみは隨意に客車を出て、上甲板の休憩室に出入するの自由を有する、されば廣き上甲板を潤歩しつゝ眺望を恣にし、或は降つて下甲板の、丁抹國王および皇后陛下の御肖像を飾れるた美はしき食堂に談笑しつゝある間に船は對岸にと着いた、四艘の渡船は二つは獨乙二つは丁抹の所屬にあつて居るさうだ。

▲丁抹國

丁抹國の首府コツペンハーゲン市に着いたのは夜の六時半、人口四十二万と言へばわが名古屋市に比せんでも中々に賑はしい、漆喰張の道路はつれに清められ、店前裝飾法の美はしき獨乙に於るが如く、何れ劣らず巧妙を極めて居る、明れば十四日あり。

▲世界唯一の光線療法研究所

光線療法の進歩したのは勿論最近の事である、其開祖は有名なるフィンゼン博士にして、コツペンハーゲン市の人である、此の療法によりて狼瘡を根治せしめた博士の著大なる功勞に對して贈るにノーウエ獎學金を以て

した、獎學金はシワデンの一富豪ノーウエ氏が、世の學術界に向つて最も有益なる發見をしたものに與ふべく定められたもので、由來此の賞を得たものはコツホ、エールリツロ、ペーリンド、レントゲン等の諸大家に過ぎないのを見てもいかに名譽かものあるかを察し得らぬ。

予の旅の第一目的は此の研究所の見學にあつたので、常市滞在申は最も仔細に調査を遂げた。研究所は宏大な三層樓の建築で幾棟にもわかれて居る、午前および午後診察の外來患者は堂に満ち、各國より集れる入院患者の數も又非常に多い。

光線療法室には、フィンゼン博士發明の大小の器械が澤山にふらべれてあつて、多數の患者に一人宛の看護婦が附添ひ、醫士の監督の下に治療を行ふて居る、之によりて怪物の如き狼瘡顔および赤瘰(毛細血腫)の顔が奇麗に全治されるのである、若夫れ予の専門學科に於ける結膜結核の全治、「トラホーム」療法の理想的なる暗夜に燈火を得たさは實に此のやうな心持ちをいふのであらう、皮膚病および眼科用に考案せる種種の器械を用ひて、一々患者につき予自ら其治療法を實驗することを得たのは現院長ライン博士、眼科專攻のレントガルト博士の好意によるもので、併せて記念のため、其自署を得たこと並にレントガルト博士より特に招待の宴を開かれたことを感謝せねばならぬ。

研究所には、十數名の醫員と五六十名の看護婦が在つて、その光線療法部は皮膚病以外心臓病「リヨウマチス」につきても又大仕掛の装置を以て光線療法を行ふて居る。

▲丁抹國王の研究所

由來狼瘡は白人に多く、黃人黑人には稀有の疾病とせられてある、フィンゼン博士、二十歳にして光線療法の研究を始め爾來苦心をつみて遂に其成功を得、不治の病と稱せられた狼瘡患者に一大光明を興へたのである、されば博士は宛らに神の如くに尊まれ、事國王陛下の敕聞に達するや、陛

下之を丁抹國の名譽として喜び給ひ、其御姉妹にあたらるゝ現英國皇后陛下たよび露國皇后陛下と共に此の研究所に行幸ありて、親しく嘉賞せられフインゼン博士と共に記念の御撮影がある、然るに天此の偉人の命を惜むこと餘に速であつた、博士は今より四年前、三十四歳を一期として永き眠りにつかれたのである、今や國庫から毎年二十五万圓の補助を得て益々其の研究を進めて居るさうか。

▲血清研究所

日本の細菌學の進歩は著しいもので、従つて血清療法も、これのみは世界に誇るに足るのである。コンペンハーゲン市にも亦斯種の研究所が設けられてあつて、院長マドセン博士は予の訪問の際極めて懇切に室内された、建物最近の新築にして良く整頓し、内外の秩序整然たるものであつた會て傳染病研究所の秦技師から、是非一見の價値ありと語られたのも偶然ではなかつたのである、近く二月前にはわが北里博士が、此研究所を訪問して賞賛止まなかつたさうである、又近來米國にて名聲ある細菌學者野口英世氏は、カーネギ獎金を以て此處に留學せられた、或室にて氏の寫眞が掲げられてあるのを見た。

博士は四十歳にも近からう、いかにも濃厚な紳士で、其住宅は研究所にあつて、斯學の研究には全力を注いで居らるゝさうだ珍らしくもふつかしく思つたのは、所内庭園の日本菊花が、今を盛りと咲き競へる事である、先生が手づから其一枝を折て予に與へられた厚意は深く忘れぬ。

コンペンハーゲン市にも花屋が多い、何れも日本の菊が手際よく作られるのを見て、宛ら故國にあるかの如き思ひかした。

▲訓盲院を觀る

眼科醫が、盲人教育の智識を有つ事は必要である、前に獨乙ミュンヘン市および伊太利チアペル市の盲人學校を見たが、今又コンペンハーゲン市にて此の學校を見るの機會を得た、校門を入ると、庭園があつて盲生が二

人宛腕を組んで、三々伍々徜徉しつゝあるさまを見て何となく可憐らしく感じた、事務室に至ると、四十歳餘りの之も盲人が小包の荷作をして居た、紙包絲締ふどふ、巧みものである、校長に伴はれて校内を普く縦覽したが、百名の盲生中男が七十名女が三十名あるさうだ、點字にて普通教育をなすの外種々の職業をも教へて居る、靴工部には十五六より二十四五歳までの盲生が八人、盛に靴を拵へて居る、監督の老教師は丁寧に教へて居た、竹細工部あり、竹を用ひて雅致ある椅子を製作し、之れに日本製の疊表を張つて居る、原料は日本から仰ぐ所であると校長は親しげに語られた、籐作工部には椅子に用ふる藤網(普通の椅子に用ふるもの)折籠、乳母車、安樂椅子などを作つて居る、是等に使用する尺には點字の度盛かしてあつて、鋸小刀錐ふど總て盲人の扱ひに適すべく造られたものである、活版所には點字の印刷をして居たが、一面刷両面刷の事も出するさうだ、音樂部はピアノ、ヴァオリン等を教へ此他刷毛や繩を作る部もある、併し我國に見る如き按摩科はなかつた、西洋には按摩業はふいからである、猶進んで裁縫室に入れば、五十歳あまりの女教師ありて十二三より二十四五歳までの女生が十五六人、「ミシン」器械を使ふもの、或は日本に於ける如き運針法を以て縫ふものもある。

教室の瞥見を了るや、今度は予の爲めに特に學生の諸種の運動を縱覽に供された、先づ八名の盲少女が二列に並び間隔をとつて徒手体操の如きを行ひ、次に直徑四五間もあるべき橢圓形の手摺によりて盲女の一群が驅足をやつたが廻れ右の號令で再び變ひよく一齊にこちらへ向つて走り始める、脊や頸の屈伸運動をも行つた校長の説明によれば、盲人が常に俯き風む癖あるを以て之を匡正すべく、種々の体換法が考案されてあるさうだ、至當の理由を言はねばならぬ、又更に運動場に出て十二三名の盲男生の一團をしてフットボールを行はしめた、教師の監督も行届いて居るが、之は又不思議な位極めて巧妙に運動中一人の撞突者も見なかつた。

(通信)

盲生用のフットボールには球内に鈴が入れてあつて、其の鈴の鳴る音によつて競技者は球の方向を知り得る仕組にあつて居る、最後に竹馬に乗つて見せたのには少はからず驚かされた。

丁扶國には兄此の一個所の盲院あるのみで其一個年の經費八万圓、別に六歳より十歳までの盲生の小學校があつて、それを卒業すると此の盲院に入學せしめ、普通三年間自活的職業を授け、猶其賢愚によりて職業の進むまで一二年は在學さすやうにふつて居る。(なほり)

○日野(羽根田)信次氏及松久祐馬氏通信

(山崎教授宛)

獨逸國ミュンヘン在學中の兩氏より山崎教授の下に通信せられしを茲に拜借し會員と共に歎を等ふせんぞす、

烏兔勿々茲に明治四十二年も最早旬日を餘ずに至れり、謹て母校の隆盛を祝し先生の健康を祈る、回觀すれば渡歐以來一年有半、天涯の異郷に起伏し明す旅衣、三更褥を蹴つて故國の夢に驚きたる事幾次。思へば〳〵洋行と云ふ者故國にありし昔には、夢の間も西の空にあこがれ哀れ尺の身碎かは碎け、歐洲と云ふ都國に行けば希望凡て足りふん。山の如き困苦何かあらん自ら飛躍すべし、海の如き迫害何かあらん自ら擊破すべしと期したるころ思かふれ。夢に慕ひし都に來てありし昔の山家風景を憶びて袖を捲りし者獨り何某の大納言のみには候はず。小生獨逸の南ミュンヘンに住居を固めて時折は伯林の月の夜も。巴里の花の都も、さては端西の大公園伊太利の大美術。所さらばす獵り候事定めて浮き〳〵面白き様に存せられ候人もあれど何とか包まむ、旅の修驗者とは世の忍ぶ假の名。誠は困苦と迫害とに得勝たで、何所か此仇敵の姿を見ざる所もかゝる、智慧袋を頭沙の代りに諸國行脚の曲者に候。何をか包むべき小生は美濃の住人百姓彌太郎が倅、世が世あらば三びんの士様に切捨御免が恐ろしさに路傍の草に土下

三

座をせし者、ありがたき明治の聖代に浴して今は百姓の倅が。大きき黒船に乗つて干哩の波を横り、佛陀の舊跡印度を横目に睨みて、佛蘭西はパテレンの本國。馬耳塞とやらへ上陸して、赤髯の毛唐さんやら出胸の細腰やらさべら〳〵話をしたり、手を握つたりする者が恐くオウが在所に開關以來又一人もあるかいと。船の窓から螺の様か拳をマゝと出して威張つて見た迄は至極腹境に候へしも、さて落付く先は獨逸の都、大きき停車場に降りて見た剗那から。曠天眞向割の大上段に小ふ心を寒からしめた一事は、時も時在留邦人の集會とあつて某ホテルに到る日本人。小生を好き機會にて印度洋の燒きたての頭をツン出した時あり。獨逸くんだり迄來て學問サツシャル程の大人物は國に一人か郡に半人か、歸朝の後は參議や見習大臣は待つ間の事と思ふて居た程の小生。驚いたりか名も知れぬミュンヘンと云ふ都に一寸の集會に四十餘名。髮の別振り男振り鬘はカイザー頭類迄剃り立てた青黛の跡。着たりや着たり黒光りのフロツク。何れを見ても一癖は愚か七癖八癖を描いた連中折柄の珍客たる小生あるにも係らず、戀テコふ黒入道が舶來したる位の眼付一向に相手にしてくれず。就中も親切か。私語して曰く嗚呼君洋服を早速明日新調し給へと。何事ぞ東京第一等の洋服屋の仕立端端をウント、ハツングにも關らず。傍人の私語を聞くと君の洋服では全く日本人全體の……………に係りますかられさ。彌太郎さんの倅は仲々勉強すると村の吉兵衛さんに賞められた小生。獨逸留學生が一心不亂に學問して居る狀に比べては九牛の一毛あり。一方にはハイカラ一方には勉強。ハイカラと勉強の使へ分けは確に留學生の現狀あり。勉強も近頃御承知のドクトル受験の程度上の爲め頗りに激烈を加へ。日本人には五ヶ年の在學を安せざれば受験を許可せずとの新令發布せらるゝや。獨逸人と寸毫も違はざるスタルクの試験を施さるゝや。眞に其名に反かざる獨逸醫學博士の看板に偽りの無き試験の遣り方。試験が困難なるに從ひ勉強も之に正比例し。五ヶ年在學等は一種の迫害あり。今更オメ〳〵郷里には歸

れず試験さへも六ヶ敷い者。大臣にあつては、相談に來る人もありとも覺えず。されば前記の通り歐洲各地偶々も偶々探して見たれど仲々の、夫々さん。容易に學位を呉れる者で、かつた事を探索して。茲に大に感心して昨今は石の室に閉ぢ籠つての讀書參味。昨今の寒氣にも係らず汗の出あんど御賢案有之度候。

汗の出遣配に多少はあれ。汗の出ぬ者は一人もあるまじき事と存じ候。母校を出られた先輩田上清眞君既に多年勉學せられ、今學期再びミュンヘンに眼科を研究やがては光輝ある「ドクトル」の學位を得て歸朝あるべし。グライスワルドの松久祐馬君又當地に來り小兒科のパウドラ先生の指導に依りて目下「アルバイト」中小山田繁次郎君今回新に加はり産婦人科を其れに小生と都合四名久敷歴伏しつゝありし金澤党是より大に振はむと存じ候。昨年小生と同居しありし越前の婦人科醫川合齋君は目下シュツイツの首府ヘルンに而於て風景絶美下平用彩先生の開殖地にして有名なる大家雲の如き中において致々斯道の爲「アルバイト」中餘は後便にて萬々、只今電報に依れば下平先生來春早々當地に來遊すべしとの旨歡喜何ぞ比するものあらんや（明治四十二年十二月十五日）。鬼佛生

本日偶然に獨逸通信を記載中に鬼佛氏を訪ひ何か書けよとのことに、茲に紙端を借りて斯くはものしつ。人苦し獨逸に遊ばん欲せば須らく編輯を善く持來らずべし生が着獨の際には勿論數月前迄は元來讀に乏しき事として、結局スツベヤ汁物の後に五色の虹を懸け連ねたり冬時水晶の「タルセ」もて鼻下を飾るも餘り感心すべきにもあらぬと悪口はすれ、實は眞可惜の何とやら、人生の半も過ぎて參拾にも達する成年を「メコニウム」臭ひ十九や二十に見られては閉口頓首云ふの過日來「カンタリス」丁幾やぶど「エルネールンカ」は興へねど、ママ立てて見よと苦心慘愴、此頃はどやら其らしい者に成つたも、當人大分に得意で居るもの人を顯微鏡的

(通信)

だに嘲笑するが。苦し夫れ日野君の鬚と來ては亦大に振つたものである、加藤兄のは元より美談天神姿をも生さうかと得意満面、左右の「タツンエ」には香水や髪刷毛やら、グット、「カイザー」を氣取るも、免角鬚ふらては通らぬ。生も小便臭いグライフスワルドから茲民賢に來たら何だ、五尺の體軀もヌット大きくかつた様に思はれる、住むべきは都會かなと點頭かれる、見るもの聞くものが驚嘆を償する、從て膽も大きなるが、滑稽も演ずる是も修業の一つと云へば何だか情無い様なもの、其内に慰安がある故郷遠く遊べる身ではマシテ一家を成し父チヤンも、さう意地る嬢チヤンや坊チヤンを子に持たる、父チヤン等は朝も夕も、如何なる感慨を抱かしてあろ、餘り突然であるので腹案もかければ茲に筆を止め候。賦中生。

●在歐會員の宿所

- Prof. Dr. Schimodaira Yosai, Seilenstr. 27, Bern, Schweiz.
- Dr. Kawai Misago, Gutenbergstr. 3, Bern, Schweiz.
- Dr. Kato Kan, Ludwig Wuchererstr. 71/2, Halle a. S, Deutschland.
- Dr. Tugami Sadayuki, Sollen, München, Deutschland.
- Dr. Matsuiwa Yuma, Maistr. 25/1, München.
- Dr. Oyama Schigetsiro, Maistr. 25/3, München.
- Dr. Hino (Haneda) Nobuji, Schwarzhalsstr. 73/P, München.
- Dr. Ohnuma Soroku, Frankfurterstr. 10/2, Leipzig, Deutschland.

○日野信次氏通信 (松原教授宛)

未だ咳聲に接せず候へ共御芳名は千萬拜誦仕候御歸朝後益々御壯健母校の爲に御蒞穉被下候段感謝共事に御座候目下當地には田上、松久、小山田、三兄と小生有之金澤出身の大半を集めたる次第に有之候精神病學者クレバリン博士不相變ゲーゲン、ヤパーナにて一同恐縮の體に候然れとも目下學

(通信)

長はパウアー博士にて我々には大の喜び、モツアールトの姿さんも達者、下平先生は來年一月當地に來らる、答同窓生歡迎會を催す筈に御座候。雪は毎日降つて居る、嚴重にも祈御健康候。

○岩井尊宗氏通信

四十一年度卒業の氏は卒業後兵庫縣立神戸病院在勤中ふるが一月十五日附を以て左の通信を編輯係へ送られたり。

さへ見ぬ當地の事に候得ば空林を渡る朔風の音もかく枯木に叫ぶ寒禽の聲も知らざれば管に冬らしく覺えざる間に植木屋に列べたる福壽草は眞盛かり病院の梅蕾も擧げる許りに相成候へば年賀てふ嘉祥に帰てられて今は心の駒さへ者心地に乗り出し申候されば我神戶同窓七日會も樂しき新年の宴を張らんと期せし折柄恩師佐々木先生が當地御來遊の事を承り如何にもして先生の溫容拜し度先生の御咄しにも接し度且は我同窓が此の地に於て此の如くあるを好機とし例に依て七日午後六時諏訪山遊友情濃やかに松の緑の干代かけて西の常盤に打集り申候會する者佐々木先生を初めし淺利、松尾、安嶺、山内、吉武、淺田、鎌尾、露津、尾崎、杉内の諸氏及び小生の十二名に御座候先生が謙遜深き辭令の中に溢れ出したる溫情の透きて在學中の昔懐かしくそぞろ無邊の感に打たれ嬉しく舞ひ樂しく歌ひ和氣鶯々夜の闌くるも覺えず此頃實に愉快に一夜を過じし申候。元當地は岡山醫專大阪高醫の勢力範圍にて我等同窓は曉天の星の如きも尙世上の歡迎を得つゝあるは一は母校の賜と一は同窓先輩諸氏が校風發揚せられしに外ならずと存候先は當地新春第一春として是にて禿筆を擱し候終りに學友諸氏の御健在を祈り候草々

○三股梅吉氏通信

(林篤氏宛) 三股氏は元本院外科二部勤務目下札幌地立病院外科醫局主任として敏腕を振はる、方かり今左に氏の短

信を録せむ

前略、昨冬函館の細田繁氏腋窩淋巴腺炎にし當院に入院手術仕り候原因は右拇指の小割りギフトを吸収せし由に御座候三週間に未治退院仕り候手術當時は意氣消沈の有様ふりしも追日元氣いて井上雄雄氏予等も馬鹿話致す様相成餘程輕快致し歸函仕り候細田氏入院の御陰にて廿九年以來の金澤の模範病院の有様諸先生の噂等を聞き誠に愉快に有之申候井上氏は昨年夏靜岡へ轉任甚だ淋しく相成申候弘前の上野忠氏は元氣よきやら悪きやらチウも何とも申し來らず候先は右まで。

○佐々木信氏通信

四十二年度卒業の氏は目下東京府荏原郡羽田町大字羽田千六十四番地東岸病院に在勤せられ一月八日附左の通信を石川精一氏に宛て送られたり

(前略)小生事同しく十二月初旬何か獲物に會合せむものを陸奥のおくをば旅立せし都の空に迷ひ出で申候處田舎旨の何さかく心遅れてた寄りなや兼れての望みは果たし得ずわれと我身を果敢みて去月下旬來藻の香も高き東岸の一寒漁村に徒然ふる日を明かし暮らし居り候就ては(中略)君よ星まむらふる宵には住み馴れし北國の景も追想せられ候へば花咲き實の折には蓄に倍し御信書を給はらん事切に御願申上候(下略)

○小野澤庄桂氏通信

四十二年度卒業の氏は卒業後歸郷せられ一月八日郷里より石川氏に宛て左の通信を寄せられたり

(前略)小生事當地諸有志の切なる懇望を入れやむかく信州の山奥に父の手助け度し居候何れ早晚廣き舞臺へ飛び出し度と思ひ居候(下略)

○佐々木茂樹氏通信

四十二年度卒業の氏は當時宇都宮市旭町の六四渡邊病院に勤務せられ一月三十日通信(石川氏宛)を寄せらるるこ

寒氣強し、御地の近況如何伺ひ度し、昨夜は金澤出身のもの八名集會す松浦先生も出席せられ初めて一杯傾けたり昨年出ば私のみより仕事は多忙に候御地如何人事知りたし(中略)在命諸君へ宜敷願上候

久保武氏端信

(二月吉日八田智証氏宛)

(賀正) 毎度御銀書を忝ぶじ感謝の至りに候小生不敏未た何等の業成らず汗顔の至りに候只微力の及ふ限りは勉めて母校の面目を失はざらん事を期し居り候少しく研究の都合により下記の箇所へ轉居仕候學校の方も此頃愈解剖材料を得る事とあり大に満足致居候今後愈活動致度と變み居候同窓の諸兄へ宜しく御傳聲願上候十全會へも別に通信致す(き答の處實は小生義名古屋の方が在職致居る事故同校同窓會雜誌(今回校友會雜誌と改題)に每號詳細通信致居候間御序の節御覽被下度願上候

韓國、龍山、山下町入番地

神谷貞二郎氏消息

(二月七日發八田氏宛)

賀正、突然辞芳懇感謝々々生既に職を抛ち漁民を友として本郡の僻所に在り突然近山の仙人他日上沿の折は濤姿に接せし今後愛顧を垂れたまへ

加賀河北郡、高松

宮井勇氏通信

(二月十三日發八田氏宛)

拜啓、昨下酷寒の砌に御座候處貴下倍々御勇健の段遙に奉賀候降而迂生幸に無恙偷生罷在候間乍他事御放懷被下度候却說五日安東縣へ御差出の御葉書正に落手仕候處再び當地へ賀狀を賜はり恐入申候此罪全く迂生に在り幾

重にも御赦し被下度願上候小生昨年十一月安東縣を悲觀し滿鉄病院に斷然身を入れる事に決し十二月二日彼地を發足仕り五日此地に赴任仕候早速御案内可申上筈の處多用に忙殺され不斗欠禮仕候段不惡御容捨願上候愚妻は尙一ヶ月許り母と共に彼地に居残り居候昨年……………今に効ふし噫、右御禮旁御詫迄尙我校より續々博士の湧出するを待居申候勿々

清國、公主嶺、滿鉄病院

\* \* \* \* \*

内地雜誌

各所の新事業

今年中に各所に於て實行さるゝ新たななる事柄を豫想するに、概略左の如きものありと云ふ

▲文部省

▲東京醫科大學 本年度に於ける東京醫科大學の新事業は可ふりに多きやうあり。即ち病室、洗滌所、廁所の新築をなすことは既に確定し尙ほ其外外來診察所に於て齒科醫の研究機關を新設するの件も十中の七八迄は事實さるる模様なり。又久しき問題なる、大學講義の一部開放即ち、大學内の一部又は三井施療病院にて、大學の臨床科教授及助教授が、民間醫師

の爲め臨床講義を開始すべしとの件は、客年中種々議論ありたる事乍ら、最早討論も終結し、開始論が勝を占めたる事なれば、本年は多分實行さるゝ事あるべし。又同學より海外留學を仰付けらるゝ人々は如何と見るに、今日迄に略ぼ決定し居れるは眼科の助教授中泉行徳氏一人あるも、引續き生理學助教授須藤憲三氏も留學を命ぜらるべく、尙基礎科より二三名の留學者を見るに至るべし、尤も之等の人々は近き將來開設さるべき、新潟醫專及東北醫科大學の教授候補者たるなり。尙教授の海外視察順番に當り居れるは、三浦謹之助、山極勝三郎兩氏中の一人あるが、或は多分他科との關係上明年に廻さるゝやも知れず。

▲京都醫科大學 同大學は前年來新築中の精神病々室が本年八月頃落成する豫定あり。此他に眼科、小兒科教室も落成すべく、眼科の舊教室は耳鼻咽喉科に使用さるゝあり。本年新設さるべき講座は藥物の第二講座、生理の第二講座、及泌尿器科の講座からん。海外留學者は小兒科助教授三浦操一、郎氏の既に内定せるあり、氏は二月下旬に出發すべく既に行李を整へ居れり。聞くも頼母し此他二三名の留學者を命ずる筈なれども、今日の處にては未定さいふの外なし。教授の海外視察者順番は天谷千松氏にして、こは殆んど疑なく派遣を命ぜらるゝならんといふ。

▲福岡醫科大學 同學は學長交渉問題あり、其爲め本年の新計畫も未定の趣なれど、昨年來着手せし精神病教室及病室の建築工事は本年七八月頃全部落成の見込あり、此他の本年度中に改築又は増築さるべき教室二三ある筈あるが、今の處にては確かからず。留學者は助教授足立捨次郎氏は最早確定と云ひて可なるが、此他に基礎科より二名を出す筈にて、内一名は既に内定せりと聞く尙同學は二三講座の新設を要するものありて、客應來文部省と交渉申かりしが、文部省も同意し居れりといへば、本年内には公表せらるゝからん。

▲各醫學專門學校 官立醫學校中に於て新潟は是非今秋九月より開校す

るに決し、それには先づ解剖、生理の二講座より始めんきて、右二教室の工事を取急ぎつゝあり、晚くも來八月中には落成の見込にて、解剖學は布施現之助氏、生理學は藤田敏彦氏の擔任にて開始せらるべしといふ。校長は池原廉三氏に内定せる由にて、新潟病院の澤田敬義、富田忠太郎氏等も職員として任命せらるべく内定せりと聞く斯くて本年は二講座に止め、引續き他の教室の落成するに従ひ開講し、來四十六年迄には全部完成せしむる事に内定し居れり。

▲金澤醫學專門學校は久しき問題なる新築事業が豫算會議に認められ、第一期事業として十五萬圓だけ豫算に計上されたり、議會の風雲も最早多寡の定まりし事なれば、協賛を得るは勿論るべく、従つて三月頃より土工に着手する運びに至るべしといふ。

▲仙臺醫學專科は臨床講義室新築費として約十五萬圓を明年度の豫算に計上されたるが、之亦無論兩院を通過すべく、今年三四月より工事に着手する由其上同校は尙來年度に於て十餘萬圓を要求し、實驗室及附屬室を新築する計畫にして、既に當局者の賛成を得、殆んど確定せしも同様なりと、尙其上に同學の之等の工事は總て將來東北醫科大學として使用し得べく、講堂及實驗室の如き、百五十人の學生を收容し得る設計なれば、若し明年度に於て東北醫科大學の設置が決定せんには、直ちに醫專校の名稱を變更して大學の看板をかけるありといふ。

▲陸軍省

▲戰時衛生史 廿七八年の戰役衛生史は去廿九年より三ヶ年の繼續事業として、軍醫學校のバラツクを編纂所とし、中村二等軍醫正以下六名の各部專任擔當者と十餘名の委員とにより非常の勉強にて編纂中なりしが、各部も既に其大部分は脱稿し印刷に廻すのみさき居れば、本年度内には其一部分の公表を見るべく、引續き夫々發表せらるべしといふ、定めし中外の好參考材料たるべし。

▲轉地療養所 昨年は漸く兵庫縣淡路島の岩屋に二個所だけ建設したりしが、本年度に於ては大分縣別府に、土地買収及び建築費を合して約十餘萬圓にて建設せるべく、此他石川縣の山中、青森縣の淺虫、神奈川縣の湯河原の三ヶ所も引續き建設に著せらるゝ筈なりといふ、

▲研究用患者收容所 寄年來改築中なる陸軍々醫學校内の研究病室は、來月中に竣工の豫定にして、患者三十餘名を收容し得る筈なるが、愈々患者を收容する曉には當直者の必要あり、それには現職者をして擔當せしむるは不都合なるを以て、勢ひ二三名の職員を増加せらるべく、内科及外科堪能者が拔擢せらるべしといふ。又研究の方針は内科特に脚氣病にありといへば、重に收容せらるゝは脚氣患者なるべしといふ。

▲脚氣調査會 同會も創立以來一ヶ年半、今年數へ年三歳とあるあり。然るに創立以來の成果如何と見るに殆んど業績とし難る可きもの皆無の有様にして、唯僅かに海外に於ける二三病竈地に實地に就き視察せしのみ、同會の本目的たる病原、豫防、治療等の三大綱目は、今日迄の處何等報告せるゝ價値あるものならず、爲に世間兎角の評を試むるものありといへども、元來調査會の性質上他の法典や鑛毒の調査の如く年月を限りて容易く成績を擧げ得べきものにあらば、今日迄の成績が面白くもして、暴かに失望し無用視するにも及ばざるあり。のみならず調査は非常の苦心を以て進捗されつゝあり、本年度中には少くも或端緒を得べく、同會の目的を到達し得る曙光を認めたりといふ。

▲海外留學者と派遣者 陸軍衛生部の本年度留學者は二名あるが、此他又海外視察員として二名特派する豫定ありといふ。目下の處既に決定し居れるは傳染病研究所に在學中の一等軍醫々學士西澤正雄氏にして、本月上旬出發するからん。今一名も某大學院在學の醫學士の一等軍醫と内定し、

外科專攻として來四月頃留學の命を受くべしと聞く又派遣員としては、三等軍醫正肥田七郎氏先づ命ぜられ、次で三等軍醫正秋山續造氏命ぜらるべしとの評判高し、或は三等軍醫正下瀨謙次郎氏からんともいふが如何にやららん、

▲海軍省 ▲研究機關 軍醫學校構内に建設中なる東京市癩癩病院は晩くも本年七月頃落成する筈なり、之にて軍醫學校實地研究機關が漸くにして出來する事あるが、然る上は收容せらるべき專攻學生に多少の變動あるべく、又癩癩病院の各部主任者は同校教官をして任せしめ、各部專攻生を其職員とする筈なりと。

▲海外派遣者 駐在員として海外に派遣せらるゝは少監田中均彦氏にして尙ほ一名は來月下旬迄に任命せらるゝからん。

▲新工事 横須賀、吳、佐世保、舞鶴等の各鎮守府病院の改築工事は既定の補給費中より其經費を支出せらるゝ事なれば、本年も昨年に引續き着々進捗せらるべし、此等の工事は何れ來四十六年中に竣工の豫定あり。

▲内務省 ▲鑛泉調査費 昨年來全國の鑛泉調査をなすべしとの議論盛なりし結果、内務當局も成可く早く實行するの意あり、今春早々各方面の學者を集め意見を徴し、其結果にて豫算を編成し追加豫算として請求するの意ありといふが、今日の處にては其見込額約二萬圓ありといふ。

▲海外派遣員 來年中に内務省より海外に派遣せらるべしとの豫定ある人々には、米國組習に開會する萬國衛生學會へ北里博士、英京倫敦に開設する日英博覽會へ、内務省出品の用向にて豫て噂ありし如く傳染病研究所技師宮島幹之助氏歐洲留學の途立寄る事に決せしと傳へらる。宮島氏の派遣は動かね相場あるが、北里博士の渡米は同氏一身の都合上にて如何様なるか、確言し難き趣也。

▲技師増員説 衛生局に技師一名を増員すべしとの説は久しき以前より唱へられ、當局亦其必要を感じ居る處あるが、本年は多分一名だけ増員を



實行するからんと傳へらる。

▲工場衛生取締官 工場法が議會を安産するや否やは未定なれど、兎に角當局者は安産を見込居り就ては同法が法律として公布せられし曉には法律執行官として工場衛生取締官を置くの必要を生ずるは當然なり、其取締官は農商務省に屬せしむるか將た内務省に屬せしむるかの疑問あれど理論上よりせば無論内務省衛生局に屬せしむべきものなり、故に之に對し、内務農商務の二省は昨今協議中の由あるが、其結果として同取締官を内務に置くに至るやも知れずといふ、コハ無論未必の事ながら十中七八は内務に置くからんか。

▲大阪高等醫學校

▲校舎病院の工事 同校の校舎及病院は來三月下旬には豫定通り落成する由にて、來四月一日より開かるゝ第三回日本醫學會は同校講堂に於て開會さる由。尙四月よりは引續き基礎科講堂の殘部の新築工事に着手する由にて全部の落成は本年中の豫定あり、されば本年中に大阪に一大醫學校の建物が顯出する次第あり。

▲海外留學者 同校より留學を命ぜられ目下在歐中の水尾源太郎氏及今一名は本年四月迄に歸朝の答あるを以つて、入替り病院の病理の田中祐吉、耳鼻咽喉科の加藤亨の二氏留學を命ぜらるゝに決したり。

▲講座の新設 本年度に於て一二講座を新設する旨囁さるゝが、經費に係あり未だ確定に至らぬも、多分實行さるゝからんと聞く。

▲京雅醫學校

同校は從來二年毎に一名の教諭を海外に留學せしめつゝありしが、本年度よりは二名に増員する事さありたりといふ又同校の敷地は狹隘を感じるにつき、本年度に附近の土地を買入るゝに決し、既に地主との約定も出來居り且つ久しく工事中の同校附屬病院は、工事を取急きて本年より滿二ヶ年後に工を竣る事とせん爲め六萬圓の豫算を追加せり又豫留學中の教諭角田

隆氏は來九月歸朝の答あるを以て、入替り教諭伊藤元春氏(眼科)は來四月出發留學の途に上る事さあり、引續き今一名某教諭を留學せしむべしと云ふ。

▲大連醫院

南滿鐵道會社の大連病院にては豫て副事業として醫學校を創設せんと計畫中ありしが、愈々今明兩年度中に準備を終へ明年内に開校する計畫にて既に其豫算も編成されたる趣あり、右に就き最初の計畫者たる後藤男に打合せの爲め、河西院長は近々上京するを傳へらる。又同院皮膚科主任壺繁彌太郎氏は滿二ヶ年間獨乙へ留學を命ぜられ、近々出發する事となり、小兒科助手藤澤謙次氏は研究生として五ヶ月間京都醫科大學小兒科教室へ派遣せらるゝに決し、又過日歸朝せるドクトル波田元之丞氏も今回同院の醫務を囑托されて、滿一ヶ年間京都醫科大學に入り外科を研究する事さありたり。尙同院の醫員は重に専門學校出身者を採用する方針あるが、現在も各科の助手は岡山醫專出身二名、長崎醫專、千葉醫專出身各一名京都醫專四名あり、今後は全部醫專出身者を採用するに決して、之等は夫々或時期を俟ち研究の爲め本邦大學又は海外に派遣する方針ありといふ。

▲東京市

▲市立衛生試驗所 東京市立衛生試驗所は本年度より擴張して一般個人よりの試験依頼に應ずる事となり、其爲め現在の建物狹隘なるを以つて、更に前面に増築するに決して四月頃より工事に取掛る答あり。

▲消毒隊 栗本庸勝氏の提案ある、消息隊設置の件は、栗本氏の案に多少修正を加へて實行するに確定せられたり、本年中には市中に消毒隊の往來するを見るに至るべし

(醫海時報抄)

○學位請求論文の題目

高安、喜多村、田中三博士の學位請求論文の題目左の如し

▲高安道成氏の分

一、腸管曠置術ノ最大限度ニ關スル試驗的研究(邦文)

一、所謂逆行性腸管縮頸ニ就テ(獨文)

一、脾臟外科補遺(獨文)

▲喜多村朔治氏の分

一、家眼ニ就キ研究セル先天性小眼球並ニ眼瞼囊腫ニ就テ(獨文)

一、交感性眼ノ組織的研究及ビ交感性被交感性眼炎ノ知見補遺(獨文)

一、移轉性眼炎ノ知見補遺(獨文)

一、糖尿病患者ニ於ケル白内障手術ニ關スル補遺(獨文)

一、「スコルプート」ニ基因スル網膜ノ變態(邦文)

▲田中友治氏の分

一、輸尿管挿入法ニ依テ手術前腎臟機能診斷ニ於ケル物理化學的検査ニ就テ(獨文)

就テ(獨文)

一、日本人ノ常尿及ビ「フロリザン」糖尿ニ於ケル粘度氷結點、電導力及ビ酸度ニ就テ(獨文)

一、「フィラリア」病症ニ就テ(獨文)

一、膀胱炎ニ關スル臨牀的及ビ細菌的研究ノ補遺(獨文)

一、淋菌性副睾丸炎ニ於ケル病理及ビ統計ノ追加(獨文)

一、敵毒ノ「スピロヘーテ、パルリダ」ノ研究報告(邦文土肥慶藏共著)

一、邦人ノ尿道及ビ膀胱ノ容積ニ就テ(獨文)

因ニ三博士の簡歴を左に掲ぐ

▲田中博士 山形縣の人、去る明治三十五年東京大學を出で、大學院に

入り、同四十年歐洲に派せられ、専らプレスラウに在りてナイツセル氏に

師事し、その間第六回萬國皮膚科學會に本邦委員として參列せられたり、

特に泌尿生殖器科に於て造詣深しと稱せらる

▲喜多村博士 福岡縣の人、田中博士と卒業の期を同ふし、在學中夙に俊才を以て稱せられ、後ち識を南滿洲鐵道株式會社大連病院に奉じ、次で獨國に航して眼科學を専攻し歸國來問も、この榮ありたる也

▲高安博士 少時東京慈惠醫院醫學部に學び、去る明治二十四年英國ロンドンに留學し、居ること五年、更に獨に入りてプレスラウ大學に故ミクリツツ氏の助手たるに二年、具さに外科の蘊奥を極め、明治三十一年歸衣歸朝し、父君の後を受けて現に私立高安病院長たり

○大連醫院の助手 目下滿鐵大連醫院に勤務する各科の助手は總計十名にして之を出身學校別にすれば岡山醫學專門學校二名長崎醫學一名千葉醫學一名京都醫學四名内務省開業試驗醫二名あり而して今後は普く全國各醫學專門學校出身者の内より成績優秀なる者を採用する方針ありと

○埴氏 南滿洲鐵道株式會社大連醫院にて醫員進學方針を定められ皮膚科主任埴繁彌太氏は今回右の主旨に依り皮膚病學研究の爲め同會社より滿二ヶ年間獨逸へ留學を命ぜられたり

○北里博士とエール大學々位 米國合衆國のエール大學は北里博士に學位を贈呈する旨を決し、既に同博士迄其旨通下來りたる由、又同大學は明年北里博士を招待せんととの意あり、全氏の諾否を問ひ合せ來りしと。

○本年の海外留學生

本年新に歐洲に留學する公私人は左の如くふるべし。△は官公費 ▲は私費 (醫海時報抄)

公人

◎宮内省

△田澤敬興氏 (待醫、學士、内科) 二月出發の豫定

◎文部省

△中泉行徳氏 (東大助教授、學士、眼科) 二月出發の豫定

△須藤憲三氏 (同上、醫化學) 四五月頃同上

△石原喜久太郎氏 (同上、學士、細菌學) 九月頃同上

△推野鈞太郎氏 (東大助手、學士、解剖) 四五月頃同上

△熊谷強助氏 (同上、同上、病理解剖) 九月頃同上

△三浦操一郎氏 (京大助教授、學士、小兒科) 三月頃同上

△長谷部言人氏 (同上、解剖) 五六月頃同上

△緒方鸞雄氏 (福大助教授、解剖) 同上

△足立捨次郎氏 (同上、學士、產科婦人科) 同上

△古屋恒次郎氏 (千葉醫專教授、學士、藥學科) 五六月頃出發の豫定

◎陸軍省

△八木澤正雄氏 (一等軍醫、學士、細菌學) 一月上旬出發の豫定

△秋山練造氏 (三等軍醫正、學士、外科) 三月頃同上

△肥田七郎氏 (二等軍醫正、學士、外科) 同上

◎海軍省

△田中筠彦氏 (軍醫少監、學士、内科) 一月上旬出發の豫定

◎地方廳

△森、武美氏 (臺灣醫學校助教諭、外科) 一月上旬出發の豫定

△加藤 亨氏 (大阪府高醫教授、學士、耳鼻咽喉科) 二月同上

△田中祐吉氏 (同上、醫學得業士、病理解剖學) 三四月同上

△藤井壽松氏 (熊本醫專校教諭、學士、外科) 同上

△林 直助氏 (愛知醫學校教諭、病理解剖學) 八月同上

△白井鐵治氏 (佐賀厚生館、外科部長、學士、外科) 二三月頃同上  
私入

▲杉本東造氏 (東京胃腸病院副院長、學士)

▲南 大曹氏 (同上、同上)

▲石岡繁太郎氏 (第一相互生命保險會社診査醫長)

▲秋山妙治氏 (帝國生命保險會社診査醫)

▲眞鍋嘉一郎氏 (學士、内科)

▲馬島 廣氏 (東京慈惠醫專出身)

▲花島習之氏 (江東病院助手醫學得業士)

\* \* \* \* \*

海外雜報

○ノーベル賞金 ノーベル賞金は瑞西の化學者ノーベル氏が自家の發明に依りて得たる資産の全部一千七百萬圓を擧げて基金とし其利子を以て年々社會人類に貢獻せる最も偉大なる人物五名を選び之を贈與せんとを遺言せられたるに基因するものあるをば皆人の知れるところなるが昨年中の功勞者中にはベルン大學教授コツヘル氏も亦其選に當られ昨年十二月十日ストックホルム市に於て毎年の通り儀式にて各七萬圓宛を贈與せられたり云ふ

○香港醫科大學設立決定

百五十萬圓の基本金を以て、香港に一大學を設立せらるべしとの噂ありしが、今回英國皇帝の御補助を蒙ると共に、土地の富豪及香港大守の賛同を得たるを以て、愈々工、文醫の三科を差向き設置することゝあり今春早々工事に着手すべしと、而して各科の教授は無論英本國より聘する筈ありといふ。

▲ペーリング氏 Mearns 氏の同氏は、不幸脊髄病に罹り、目下ミュンヘンにて加療中なりといふ、斯學の爲めにその快途に向はれんとを切に祈る。

▲ビルンバウム Blnbaum 氏 (ギョッテンゲン大學講師) は此冬學期に於けるギョッテンゲン大學の婦人科「クリニーク長」代理に任せられたり(クリニーク長はルング氏死後空位とあり居りしあり)

▲ホエー子 Höhne 氏 (キール大專講師) も亦此冬期に於けるキール大學婦人科「クリニーク」長代理に任せられたり(クリニーク長はフアンネンシュール氏死亡により空位たりしものなり)。

▲ノイマン R. O. Neumann 氏 (ハイデルベルグ大學助教授) は本年四月、コッセル教授來任まで衛生學研究所及傳染病検査所長代理に任せられたり。

▲ロエーウキー O. Laewi 氏 (ウヰーン大學助教授) はグラウヰツツ大學の藥物學正教授に任せられたり。

▲ベルンスタイン Bernstein 氏 (ハルレ大學教授、生理學研究所長) は舊臘八日七十歳誕辰を祝せり。

▲カスバリー Caspary 氏 (ケーニグスベルク大學皮膚科教授) は客年十一月十四日「マクナル」五十年祭を祝せり。

▲タツバイチル H. v. Tappeiner 氏 (ミュンヘン大學藥物學教授) は十一月八日教授二十五年祭を祝せり

▲グラスハイ H. v. Grashof 氏 (内務省報告前ミュンヘン癡狂院長) は昨年十一月七十歳誕辰を祝賀せしが民顯醫會は氏を名譽會員に推薦せり。

▲シルメン Schimmer 氏 (ストラスブルク大學眼科教授) は不品行の爲其職を免せられたり

▲ポリツチェル Politzer 氏 有名ふるウヰーンの耳科醫たる同氏は舊臘九日「ドクトル」五十年祭を行ひ、ウヰーン醫科大學は氏に新たふる「ドクトル」免狀を贈れり(獨逸にては「ドクトル」の學位受領後五十年を経し者には再び新なる「ドクトル」の免狀を贈るの例あり)

▲チエルニー Adalbert Czerny 氏 (フレスラウ大學小兒科教授) 薨にストラスブルク大學の小兒科「クリニヤ」長に任せられし氏は本年四月赴任すべしと。

▲コツク Coog 氏 はブリュッセル大學の産科教授に任せらる。

▲マキシモフ A. Maximow 氏 (サント、ペーテルスブルグ陸軍醫科大學校助教授) は正教授に任せらる。

▲ムラトフ A. Muratow 氏 (モスクワ大學私講師) はトムスク大學の精神病及神經病學の教授に任せられたり。

▲チャゴウエツツ Tschagowaz 氏 も同大學の藥物學教授に任せられたり。

▲タンフン P. Thompson 氏 (ロンドン、キングスカレーザ教授) はビルミンゲム大學教授(解剖)に任せらる。

▲マツココナチー A. D. Mc. Conachi 氏 はバルチモアのメリーランド醫學専門學校の耳及喉頭科の教授に任せらる。

▲ラーブ W. S. Love 氏 も同大學の治療學教授に任せらる。

▲イボー J. Ebaugh 氏 も同大學の器械療法學の教授に任せらる。

▲ノイマン R. O. Neumann 氏 (ハイデルベルグ大學助教授) 衛

生及細菌)衛生研究所長代理)は誠にハイアルベルグ大學正教授(衛生及細菌)兼衛生學研究所長に任ぜられ四月赴任督のなるギーセン大學教授 コツセル氏の後任として同大學教授(衛生學)及衛生研究所長に招聘せらる。

▲レツゲルホーゼ Lederhose 氏 (ストラスブルグ大學(法醫學)助教は社會醫學の教授を委任せらる。

▲テオドル・セーミツシエ Th. Seemisch 氏 前ボン大學教授(眼科)は昨年十一月二十九日七十六歳にて長逝せられたり。

▲ウイリアム・タムソン William Thomson 氏 (英國王名譽侍醫前愛蘭國立醫會々長)はダブリンにて六十六歳にて死せり。

▲レイノルツ J. Ph. Reynolds 氏 (前ハーバート大學産科教授)も舊臘病死せり。

\* \* \* \* \*

會 告

○明治四十二年十二月十七日校外十全會費納付調書

金額	期 限	氏 名
金參圓	自四十一年度三ヶ年分	高 澤 甚 作君
金貳圓	自四十一年度二ヶ年分	加 藤 慶 三君
金貳圓	自三十九年度四ヶ年分	藤 井 榮 四 郎君

金參圓	自四十一年度三ヶ年分	高 田 文 府君
金參圓	自四十一年度三ヶ三分	濱 地 藤 太 郎君
金壹圓	自四十一年度分	谷 中 黎 次 郎君
金參圓	自四十一年度三ヶ年分	中 西 島 吉君
金壹圓	自四十一年度分	佐 野 爲 明君
金參圓	自四十二年度三ヶ年分	中 川 久 成君
金壹圓	自四十四年度分	甘 利 昇君
金貳圓	自四十年度二ヶ年分	飯 塚 忠 男君
金貳圓	全	勝 木 直 吉君
全	全	増 田 貞 吉君
金參圓	自三十九年度三ヶ年分	波 邊 十 治君
金參圓	全	鈴 木 寛 之 助君
金五圓	自三十九年度五ヶ年分	北 豐 吉君
金四圓	自三十八年度四ヶ年分	鷺 山 他 三 郎君
金壹圓	自四十一年度分	猪 木 彦 助君
金四圓	自四十六年度六ヶ年分	鷺 山 謙 吉君
金參圓	自四十七年度三ヶ年分	草 野 佐 一 郎君
金壹圓	自四十一年度分	高 橋 重 二君
全	全	尾 崎 平 吉君
金參圓	自三十九年度三ヶ年分	安 田 則 人君
金參圓	自四十二年度三ヶ年分	内 藤 三 太 郎君
金四圓	自三十八年度四ヶ年分	林 正 雄君

金參圓	自四十四年度三ヶ年分	中川 良 忠君	金貳圓	自四十一年度二ヶ年分	岡村 俊 照君
金參圓	自三十九年度三ヶ年分	松原 三 郎君	金五圓	自三十八年度五ヶ年分	堀井 吉 平君
金參圓	至四十一年度三ヶ年分	津川 恒君	金五圓	至四十二年度三ヶ年分	牧 良 一君
金參圓	全	柳原 久君	金貳圓	自四十年度二ヶ年分	杉山 政 長君
金參圓	自四十三年度三ヶ年分	野村 亮 吉君	金參圓	自四十二年度三ヶ年分	中島 喜 作君
金貳圓	自四十一年度二ヶ年分	稻崎 龍 助君	金參圓	自四十四年度三ヶ年分	鴨脚 光 榮君
金參圓	自四十二年度三ヶ年分	山田 伊之助君	金壹圓	至四十三年度三ヶ年分	中野 源 一君
金壹圓	四十一年度分	伊藤 喬君	金貳圓	四十一年度分	黑田 眞 岳君
金參圓	自三十九年度三ヶ年分	武勇 三 郎君	金參圓	自四十二年度二ヶ年分	河崎 有 作君
金貳圓	自四十一年度二ヶ年分	岩崎 勝 治君	金貳圓	自三十九年度三ヶ年分	庄司 正 義君
金參圓	自四十二年度二ヶ年分	中田 徳次郎君	金貳圓	自四十一年度二ヶ年分	下村 義二 郎君
金參圓	自三十九年度三ヶ年分	城 起 吾 老君	金參圓	自四十二年度二ヶ年分	池田 葵 吉君
金壹圓	四十一年度分	山崎 芳太 郎君	金參圓	自四十六年度五ヶ年分	井上 只 次君
金參圓	自三十九年度三ヶ年分	吉江 象太 郎君	金四圓	自四十三年度三ヶ年分	淺利 義 治君
金貳圓	自四十二年度二ヶ年分	田代 保 二君	金壹圓	至四十六年度六ヶ年分	近 森 村 主君
金貳圓	自四十一年度二ヶ年分	高松 多 齊君	金參圓	四十一年度分	牛塚 榮太 郎君
金貳圓	至四十二年度二ヶ年分	清水 秀 夫君	金五圓	自四十三年度三ヶ年分	神谷 貞次 郎君
金壹圓	四十一年度分	森 舜 司君	金參圓	自四十二年度三ヶ年分	片岡 塚 作君
金壹圓	全	鈴木 實君	金參圓	自四十九年度三ヶ年分	百谷 義 一君
金七圓	自三十五年度七ヶ年分	久保 武君	金八圓	自三十九年度十二ヶ年分	諸角 友 平君
金壹圓	至四十一年度分	江村 正 也君	金六圓	自三十九年度八ヶ年分	望月 慶 作君
金壹圓	四十一年度分	曾根 章君	金貳圓	自四十六年度二ヶ年分	松原 左武 郎君

(會告)

(會告)

金參圓	自四十一年度三ヶ年分	坂本信一君
金參圓	自三十九年度三ヶ年分	瀬尾順四郎君
以上	至四十一年度	

●會員諸君に訴ふ

雜報及び通信欄を益々擴張して  
 會員の動靜と消息とを細録せん  
 こと願くば諸君奮て友人よりの  
 手紙及び端書等を本會へ御轉送  
 あらんことを切望す

編輯委員

會告

次號雜誌發刊 四月二十五日  
 次號厚稿ノ切 三月二十日

# ○恩師先生小照に就て

臺に本誌第五十一號卷頭恩師の小照を掲ぐるや之の附録に於て少しく解説する處ありき、其中(四)一(赤十字社特別社員章佩用のもの)に就ては撮影年月不明の爲め寫真店主に之を質すも確たる要を得ず、すなはち「右特別社員章佩用より推せばうれ以後なるべく奥線が一昨年(一九一四年)の春撮つた様に思ひますと申さるもにより或は其然るを思ふべし」と記すの止むを得ざるものありしが其後右遺影を基礎として銅像を鑄造し且つ其引延を額面として濟々堂に掲ぐべく企つるに及び益正確なる撮影年月を知らんと欲するの情抑ゆへからず、然るに何等の幸ぞ頃日御遺族を訪れ御令息御令嬢の寫真かど拜見しつる折思懸なくも恩師が遺し給へる(四)と全様の小照(カビネ形)を見出し其裏面に撮影の由て來る處を明にし自ら署名し給へる墨痕淋漓たる筆跡を見奉るの快事あらんとは、記に曰く

明治三十八年十月十五日

日本赤十字社總會ヲ金澤市兼六公園ニ開ク

總裁載仁親王殿下臨場アラセラル勝陳特別社員章親授ノ榮ヲ受ク越テ一日撮影ス

一葉ヲ本社ニ贈ル規ニ從フナリ

茨城縣結城郡結城町大字結城五十五番地

小川 勝 陳

石川縣金澤市味噌藏町片原丁四番地

寺島圭介氏持家寄留

明治三十八年神嘗祭日寫

小川 かめ子

三十四年八月十一日生

同 勝 利

三十七年六月十日生

十月十五日日本赤十字社總裁

閑院宮殿下石川支部總會ニ臨マラレ勝陳特別社員章親授ノ榮ヲ受ク紀念ノ爲メ共ニ寫スト云

とあり我等は即ち之を以て恩師の平素の御行爲に似給はず特に斯るものを佩用して撮影し給へる理由を領解すると共に、正確なる撮影年月を詳知するの幸を得たるを大に喜ぶものなり、一言全附録の記事を訂正し併せて永久校庭に据附けらるべき銅像と濟々堂裡長へに掲ぐべき遺影に對して謹んで其風貌を偲ひ奉るま云爾



# ○恩師小川勝陳先生遺簡

余は前々號に於て四十年八九月の候に於ける恩師の私信を公にせり、日夕膝下に陪し親しく其教を受け且つ其用を辨せしを以て其手書の如きは御不例等の爲め時ありて休養せらるゝに當り特に賜ひしもの、其平素健康に渡らせらるゝの間書牘應酬の必要なきは勿論の事なり

本號には前號載する所の外廿八年以後の消息を一括して登載し更に恩師が風手を偲はんま欲す、而して生か廿五年入科以來殆んど三年の間一の書信だに賜はらざりし所以のものは日向淺くして他に事を處せらるゝの先輩あり我等は只其席末を漬かせしに過ぎざりしを以てあり

恩師は常に自ら先づ身を修め行を慎み造次頭沛にも禮にあらざれば動き給はず専ら實踐躬行の範を垂れ言行一致の實を擧げ給へしか故に之に接する者をして仰げば毅然として犯すべからざるも之に就けばおのづから一團の和氣磅礴として身に盈つるを覺えしめ給ひぬ、其門弟子の如き規矩を用ひて之を拘束せず準繩に泥んで之を制縛せず各其長處に向て進ましめ給へしか故に各人各様の特色を發揮し毫も類似する處なきは又奇觀たるを失はざるなり、今や恩師が身を以て示し給へる教訓は親しく之を聴くへからず其德行は目のあたり之を拜すへからざるも、昨日の言行は今日の言行は明日の辞世と心得られしを以て恩師が四十四年の生涯中機に觸れ時に處して發し給へる一擧手一投足は一ととして辞世ならぬはなきなり、我等は此意味に於て恩師の一言の上にも其徳容を偲ひ一句の上にも其風格を偲ひ奉るもの讀者亦此意を以て我等が私信を公にするの微衷を諒させられん事を祈る

四十二年十一月十六日

八田智証謹識

## ◎明治三十八年

一 (四月二日)

明三日夕着仙四日滯在五日海岸線を歸郷六日滯在にて七日上京八日滯在にて九日出發のつもりに御座候

途中にて

(註)春期休暇を機として仙臺醫事を視察し故郷下總結城に歸省せられたる恩師には更に宗家なる東都小石川ある水野子爵邸に宿り無事歸校し給へることあり、こは其間の日程を報せんが爲め蒲生君平碑の繪葉書に認め乗車中投函せられたるものにして喜連川の消印あり、蓋し之を以て恩師が賜はりたる消息の最始と爲す

(五月五日)

拜啓山北にて御投函のはかき閲讀ニ不堪御衷情恐察致候一昨日イッレか電報來る同室評議の上高等學校寄宿舎令弟許へ持參す、事は猪木君を申述べたるならむ

昨夕歸らんとして貴下の達磨に遇ふ面壁九年と思の外心機一轉A B C D E Fと六字の名號誦し得て何の得る所ぞ學ふ可し學ふ可らず

歸宅直に衣を更ねんとす豚兒枕邊また貴下の繪はかきに接す〇めて無邪氣の光景紙外に溢る君が其愉快を擅にせざ

一字難讀

りしを多とす

殊に君の親友百目木君より懇言を得たるは最も愉快を感じる所願くは北遊一夕の清談あらんことを至囑と々」

今支那語を聴く目にはわかれと口にはいへずいざ達磨を學はん歟將た豚を學はん歟」

御母堂には旅の御疲れもなきやよろしく御致聲可被下候」

先日富士は見ぬさりき。舊作に

白妙の富士の高根はわかなくに田子の

浦曲の月を見るかな

却て一段の興味を覺ねたることありき」

明日デルモイド月曜ニ End 二人火曜ニ End + Dammiss 一人。Freiノ System ハ君の歸院ヲマツ。

(註) 此は砲臺上高く軍旗を捧ぐる將校を畫きし繪葉書にペンにて極て細やかに記るさせ給へしものあり、回顧すれば去ぬる卅七年八月余は末弟等と共に白山登攀を試みぬ餘勇の鬱勃として禁む難き全月廿三日宿直もソコ、單身富士詣を思立ち直に出發、夜半熱田神宮に親しく參拜、廿四日午下一點御殿場驛に下車せり、折しも神ならぬ身の知るに由なき全時刻を以て憐れ次弟友雄族順東盤龍山舊砲臺に於て戰死せんまは、爾來東上の砌御殿場を過ぎり富嶽を望む毎に未だ會て斷腸の思に咽はざるはなきあり、而して卅八年五月靖國神社に於て第一回戰病死者合祀大祭あるや余は遺族として母を奉して東上し途すがら御殿場を過ぎり懷舊の情抑ゆるに堪はず鉛筆を走せて一葉の端信を恩師の許に捧げまつりぬ、恩師が「閱讀に不堪」と宣ふもの則ち之か爲あり

「貴下の達磨」とは面壁九年からぬ達磨が頗る眞面目なる面持にてABCを習ひつゝある當世諷刺的繪端書にして「豚兒云云」とは多くの親豚子豚か面白おかしく戯遊する滑稽的繪端書ありき

「今支那語を聽く」とは當時恩師並に村上教授等の肝入にて有志の者集り病理教室にて清國留學生王建善氏より支那語の教授を受けたることあり、四聲の區別などより其發音の困難にして之を云ひ且つ聽き分くることの頗る面倒なる聽く者皆恐入らざるは莫し、恩師が「達磨を學ばん歟將た豚を學ばん歟」との偶語蓋し其間の消息を窺ふに足るへし

「先日富士は見えざりき」とは前信の通り恩師歸郷の節のことあり

## 二 (五月廿三日夜)

口 上

先刻御話の節一寸申述候と存候へ共爲念尙一應申進候

來ル廿九日(月曜)午後一時頃方衛生會の産婆看護婦講習の第一日にて別段授業は無之事と存候へ共山田講師高橋幹事杯と授業上に付多少相談致候事も有之可成同日迄に歸院被成候様致度

又マラリヤニかゝりし囊腫患者も遅くも廿九日若クハ三十日には施術致度「猪木君出發前(廿七日出發)」にては病

後に付少しく早き事と存候」かた／＼他に事情あらは兎に角左もなくは前述の日限迄に可成登院を煩し度明日もしや一番瀛車御出發等のこともあらん歎と夜陰なから一筆走らせ申候早々 五月廿三日 小 川 生 餘白にふと思ひ出つるまゝ蛇足を添ふ

聞きこめて其聲語れ閑子鳥

こは往年亡父か當時の教に子なる去ル禪僧ニ贈りし句なり、君いま永平寺に之くとき／＼かりて以て一餐を博す

○尺日尋春不見春 芒鞋踏遍瓏頭雲 歸去笑撚梅花嗅 春在枝頭已十分

君首肯するや不や

○到來物誠ニ些少なれ共瀛車中に御持參可被下

○もし加藤氏ニ會ふ機あらはよろしく御鳳聲申入候

(註) 日露戦役は我等に多くの教訓と覺醒を興へたり、小さき我等か胸は時として張り裂けんばかりに刺戟せられたり、多情多感なる余は一應の計を得て永平寺を訪れんとして迷ひ出てぬ、慈深き恩師には此輕卒を深く氣遣はれしと見ゆ全夜這個の消息を賜はり道在邇を諭し給ふもの則ち此の如く深く且つ大なりき

三 (七月一日)

換 三 寸

立山越一行の寫真御返璧申上候右上端の處聊か損傷致候段御海恕可被下不思小兒ニとられたるより起りたる不在中の出來事ニ御座候

○看護婦宛の一封も差上申候誠に面白く拜讀致候前便のものど一括していつか駄評を試みんと思ひながら昨今非常

煩忙の爲メニ機を失し殘念に存候

唯只氣付き候ハ看護婦共には全くば (gar nicht にあらず nichtganz) わからざるへしと存候のミ然し思の馳する  
まゝ筆にまかせてかきなくられ候赤裸々の處其場に在るの想あり小生もいつも旅行の節ハはかきにても片紙にても  
毎日一二三回位消息するを常とし日記の代りと致しこの春もかきすと名つけて物せんと思ひつゝいつか五月の雨  
に流されはや水無月<sup>ミナツキ</sup>てかたなしと相成候

○過般の道迷<sup>◎</sup>ふ云云の句、意ハ可なり句は未たしとやいはん道の字誠に足手まどひの感あり中く、「迷ひけり」  
の簡なるには如かすと思ひし?如何

○早乙女の觀察捉得て可なり乍去紅一點<sup>◎</sup>のふるまは紅點々の實況(?)にして語路のよきにはいつれ此句小生もらひ  
たし呵々

其他會心の點夥多ありしか先便いつこにしまひなくしていま見當らず只思いつるまゝ蛇足を添ふるのミ

(註) 過くる卅六年八月末余は富山の有志學生と共に彼の佐々木成政が所謂ザラ越の險を險に針木峠より信州に出て徒歩甲府に入り記念撞影の上隨  
意解散せしことあり、今立山越一行の寫眞とは則ち是あり

○「道迷ふ云云」は永平寺詣の途次「道迷ふ暮れゆく春の旅鳥」と正し給ひ、「紅點々」とは「早乙女や万綠叢中紅一點」を更に「紅點々」と正し  
給ふもの、櫻局並に看護婦室苑の出鱈目の余が書中の駄句などに對して斯くも注意深き批評を賜ひ教訓を垂れ給ふ、洵に感謝措く處を知らざる也  
小照一葉呈上致候小生由來生身を寫さす況んや顔のミをや謂之らく顔面ハ其人ニあらずいな其人の全部にあらず世  
人よく面識といふて心識といはずア、噫予の固ナル久シ矣又翻て思ふもこれ虚影のミ平面のミ立体にあらず實相  
ニあらずナンゾ全ト半とをとはん……………五月十六日は生が生れる苦ミを解脱したるの日なり……………いつも胸に  
浮ぶは

うつし見る鏡に親のなつかしさ

わか影なから片身とれもには

眞箇ニ然リくく生常に毎々之ヲ誦して或ハ打泣キ或ハ慰ム……………嗚呼父よ遠ク去て在まざすいなく眼前ニア  
リ脚下ニ在リ只々口語リ手フレ得サルノミいなく其口其手其……………皆コレ父ノミ而して亦コレわれ!!!  
頃日豚兒の小照ニ題すらく

われにしてわれにはあらぬわれなれば

われとな思ひろわれと思はよ

亦是同一見地」

生愚庵居士の扇を有す詩あり其三四にいはいはく

一衣一鉢三千界 青山何處不故郷

居士は會津の亡命戦後父を尋ねて四方を週遊し足跡天下ニ遍ししかも相逢ふ能はず遂に發心して禪門ニ入レリ云  
生ハこの結句に就て大ニ得たるところあり毎々居士を以て未見の師となす不思筆して茲に到る其何の故たるを知ら  
す

七月初一夜認

智證學人 机右

臥

牛

夜三更獨坐聽雨懷廿余年前舊作

茫茫故山遠 渺々前路遙 胸中雲漠々 戶外雨肅々

即興

小夜ふけてひとりしすけき五月雨の

音静かなる世にもあるかな

(註)「小照一葉」以下は嘗て五十一號巻頭に掲げたるもの、今重ねて之を拜誦す、則ち恩師か至孝至親の據て基く所を察すべく又心胸深く藏め給ひし人生觀の一面を窺ふに足るべし

◎明治三十九年

一 (八月廿七日)

口 上

昨夕ハ態々御來訪被下殊ニ滿韓及吉備各地方ニ於ケル御土産物遙るく御心ニかけられ御携帶被下候御厚意ハ深く銘謝致す所ニ御座候然して尙健更に健を加ふる貴下を親しく見るを得タルハ亦一層の愉快に有之候何レゆるく珍談承度と存居候

儲今朝ハ電話ナタトモ是非一寸ナリトモ登院ノ心組にて夫々用意致候處又候氣分如何ともあしく眩暈昏倒の氣味アリ殘念ナカラ中止致候事ニ候本日ハ月曜にもあり無人にては御困りの事と存候へ共右の次第あしからず御承引〇〇  
〇三字ノ難讀

〇菊地君其後如何ニ候や岡田君本日出勤不致候や如何果して歸郷致候様子にや笠君本日の都合ハ如何

廿七日午前十一時認

〇衛生會ハ廿三日始業と記憶致候廿五日ハ小生分にて休講本日ハ如何の都合にやこれも可然御都合御取斗願置候

(后畧)

○尙御手数敷ながら此者ニ別記の藥劑御投與可被下候

重 健 散

四、〇

ヂアスターゼ

〇、五

コカイン

〇、〇五

右分三

與二日分

セルテル水

一 劑

右之通

(註) 七月廿三日金澤を後にし宇品より三吉野丸に便乗して大連に上陸し旅順より鉄嶺に至り更に安奉線より韓國を縦斷して八月廿三日歸滯せる余は翌朝直に登院せり、而も思ひきや余か出發後鷺山謙吉君辭職して在らず岡田虎介君無斷歸國の怪事あり篤實誠直なる菊地文倍君獨り恩師の下に在りて三伏の瘧疾に務め仁俵ふる檢梅醫笠備吉郎君餘暇出院して事を輔けらるゝあらんとは、さても好事何ぞ寛の多き恩師董胆を憂ひ給ひ菊地君亦胃腸を害ひ相次て靜養の止むふきものあり、爲に余は歸來匆々の軀を以て終日内外の診療を擔當し笠君の好意によりて纔に連直の煩を免れ九月一日始めて親しく診察し給ふ恩師を迎へ全七日菊地君の全治登院を迎ふるに至れり

當時余かものせし婦人科密直日記に曰く

(八月廿五日の一節) 「去月廿三日朝ボカンと滿韓に行き今月廿三日夕ボカンと滿韓より歸る、其間得る處唯其顔銅の如く其衣漆の如きのみ、昨朝登院、小川部長並に菊地酒泉守病氣休、而も長途旅餘の休養は變して窮餘さふり尙明日曜の内外患者の診療をも背負はさるへからずに至るこは、一に是れ人の苦も察せず、のらくら滿韓之野をのたくつた顛面天罰、今更何の抗辭があらふぞ……………」

(八月廿七日の一節) 日曜 晴

「登院間もかく松田教務來院、小川先生を待つ間一時半、雜誌、乃ち電話をかりて先生の御登院いかんを尋ね、云く今日登院の意ふりしも容態勝れず立たんさ欲して眩暈卒倒の憂あるまゝ不得止休養すま、教務他日を期して歸校(困云先生は當時、われ外來診察を始め、すべて三十五名内新患四、午後漸く了る、今日笠君檢梅、菊地、岡田兩君欠勤、而して午後よりは産婆生及看護婦生の授業のあるあり何とかして授業をもふし診察をも早く済まさんさ力むるも心のみハヤル計にて事はかどらず、二時ホット一息つくさ共に更に入院患者診療を續行し、殿さして救恤勝脱腫瘰患者の拔糸を終



リしは正四時

一昨日われ強辨して多忙の身に加はるを稱譽し期待せり、果せる哉醜面今日の多忙は、思ふに昨年八月移轉以來外來患者冊名に上りたる事殆んど皆無にして事毎に舊病院を夢み見つある者實に吾のみぢらざりに、計らずも今日の盛況・移轉以來未曾有の繁昌はげに我をして晝食をヌキにして業に従はざるべからざるに至れり、而も其事や頗る快にして我心亦頗る快、些の疲勞些の不平、かく裕々追らず愉快と満足とを以ておのづから怡然たらしむる所ありしは近頃奇しきこと共ふりき……………」

二 (八月廿八日)

口 上

昨日ハ色々御手數奉謝候

菊地氏岡田氏本日ハ如何

下宿ニ在リヤ否ヤ御序ニ小使ニ御確カメ置可被下候

本籍餘白ニ御書送ヲ乞フ

無人の處甚た御氣の毒ナレモ本日もよろしく願候

昨朝フト氣付キタルハ小生發黃シタルカト自ラ皮膚ヲ檢シ考フル處ナリシカ昨日午後佐々木先生見舞ハレ一望イクトルスあると証明サレタリ食機全然欠損全身異常ノ倦怠皮膚一種の異感皆故アルト存候就而ハ

カル、ス泉鹽 一五、〇 右頓服用量

右のもの二回分戴き度尙

オレキシシ 一、〇 百弗聖 〇、三 乳糖 一、〇

各分三包 一日分服 一日分

右よろしく願候

三 (八月廿八日)

殘炎却て烈敷一人にては御多忙サコソト恐察ニ不堪候然シ昨日三十五名とハ近來の盛況、閑より寧ろ忙なるは却て愉快ニ被存候小使唯今岡田氏下宿より參候まゝ一筆認メ申候

○南北齊棟各一名の取締選定に付きては一應御相談致度御歸途御足勞ながら御立寄被下候ハ、幸甚

廿八日午後一時

◎明治四十年 (前々號誌上廿四通掲載)

一 (六月廿二日出)

貴書昨朝病院にて拜見致候御歸宅後輕熱御發の趣兎角不順の季節一層御用心可然と存候當方は御承知の如く差したる忙敷事も無之候まゝ十二分御攝養可被成毛頭御遠慮無之様致度此儀特ニ申進候

貴家目下御普請の趣——以上貴書を病院にて閱し歸宅後早速認メかけ候處種々の障碍ニ出遇ヒ本日迄延引遂ニ再ヒ滯く浦上りの來書に接するに至る——恐察の至ニ不堪候拙家また移轉の運ヒニ至らず閑居候先方都合次第いつにても參り度參らは早速多少の手入等致さねばならぬ事と存候多分來ル三十日以後ニならん歟と存候前の日曜なり

しか松村魁氏訪ハル臺南ニ二年半在勤今般東京衛戍病院ニ轉任云

(註) 和倉温泉に保養すべく久々にて歸郷せし余は吾家のマダ壁も乾かぬ荒普請なるに居り處もふく不勝避易しぬ、而して幸に今日の健康を贏ち得たるものに恩師か賜也、「十二分に保養せよ」との言、此一語眞に師恩の深きを憶ふべし

「拙家また移轉の運ロニ至らず」とは下本多町の寓より新に求め給ひし長町一番丁へ移り給はん折のことにて故内山行實氏の邸となす、而して松村氏また全居せられ、恩師には購買後二ヶ月間先方の願に依り無據移轉方延期せられたるこそ是非なければ

招魂祭第一日の夕公園ニ飯森ドクトルニ遇ふ混雑中餘談ニ涉らす

民賢雜觀ふどあまたゝび寄せられ本誌通信欄をして幾段の光彩を放たしめられたる飯森益太郎氏には在獨幾春秋茲に「ドクトル」の榮冠を負ふて此月無事歸朝せられたり、氏や我か十全會會員中「ドクトル」の學位を得たるもの、嚆矢にして恩師が公園にて邂逅せられたるは歸朝後旬日を出でざる間ふり

一昨日木下軍醫病院ニ訪ハル明日歸郷云云餘リニアツケなし實ハ君ト越野(目下能州出張?)岡田諸氏の舊知と會ノ一夕の歡を盡クサント思ヒタリシニ好事魔多しとかや拙宅にも老母疾ミ小生も昨今劇甚の齒痛ニなやみ飲食ハ勿論談話にも困難を感じ居候次第殘念の至リニ存候

(註) 恩師には久しく膝下に陪せし舊知子弟と一堂に會して歡談に時を移し清話に其款を深くせんき希ひ給ひしもの茲に年あり殊に最近一兩年時に之を漏らし切に其機の到らんことを望み給へしは御家族始め我等の屢次聞知せし處ふりき、而も恩師が所謂「好事魔多し」や識をかしげん其好機ふくして終に世を隔り再び逢ひ奉るの期に至れるは實に悔恨の情に堪えざるなり、我等は恩師長逝以來毎月十六日の命日を以て或は金谷館に或は公園米永に或は私宅に隨時會合して夜食を共にし、せめてもの心やりに遺弟として謹て追望の誠を致し其親睦を深くするを以て常例としつゝあり、集ふ者國本、越野両兄を始め當地在住の者僅に數輩に過ぎざるも正に議るべきは之を議り正に爲すべきは之を爲し務めて遺漏かからしめんことを期す、只人生離散の習遣般の會合今後幾年々繼續し又繼續せらるべきかを知らずと雖若し能ふべくんば一人にても生き長らへたる者の命あらん限り之を繼續し之を記念せんことを欲す、さるにても遺憾に堪えざるは恩師銅像の或餘儀なき些事の爲に除幕式無期延期否學校新築迄延期せられたることの思出多き事よ、年老ひ給へる御隣居様始めあどけなき御遺子達、あるは我等門生一同果して其期に至る共に健在ふるべきや否や、彼

を想ひ此を思ふて一念、こゝに到る余は轉た人事意の如くふらざるを嘆せざるを得ざるあり。

三日前ナリシカ岡田氏宅ニ新保琴を診す局部ハ案外(外觀的)變化ナク候へ共近頃時々出血殊に日夜劇痛ニなやむ由殊ニ驚くへキハ頸部(Dors.ニアラス)ニ拳手大以上の癌塊ありて毫も障碍ナシト云自云ふコンダハ不治トハ思へ  
凡痛丈けハナクシタシ尤もなる申條目下病院にも三十餘名の入院者中五(六?)名の癌者アリ内四名ハ術後輕快シタ  
レ凡一名ハ出血丈け止メド痛ハ殆んどかわらす誠ニ同情に堪へされども詮なし毎々常々謂ラク人ノ自然ニ打勝ツヤ  
三字難讀  
○○○……………

(註) 此一節は岡田剛吉氏宅に於て老妓越喜琴を診察せられたるを報せられしものあり、一昨春恩師手術を施し給ふや經過頗る佳良にして人をして  
瘡を果して誤診ふらざりしかと問はしむるに至りしが而も一時の現象にして反て他に蔓延せしぞ憐れふる、只一事の記るべきは此老妓の頗る  
眞面目にして仮令如何なる些細なる事と雖部長及我等醫員の命を受けざれば之を苟くもせざりし事是あり、爲に嘗て非禮の地を踏まず嘗て非禮の  
聲を聽き給はざりし恩師も「サスガ大將とあるへきものはドコカ違つた處がある」と稱讚せられたり、

二

和倉にて御静養至極よろしくと存候小生も六七年前多田吉松宅ニ關屋氏ニ案内サレ母と五六日間滞在シタルヤニ覺  
けたり(四月休ミニナリキ)當時ハ新建テ平屋の一室ナリシト覺ふ其後毎年賀狀ハ贈らるれど再遊の機なく打過きた  
り  
老母の疾癒はなば何レにか浴セシメント思ふ

越野氏ハイツカ途中にて聽キシニ明日か本月中能州地方に出張町村役場員等ニ衛生講話(習?)ヲナス云云警察電  
話ニテ何レニ居ルヤ分ルナラン歸途和倉ニテ講習をすゝめてハ如何

夫妻の入浴云云 かの生子に付きてハ實ニ千日の萱も一日ニナントヤラの諺も思出されて殘念氣の毒に候

早瀬氏いつか長町にて背姿を見しのみにて未だ會せず」

小生の參りし頃ハかの高井宮五郎氏和歌崎ニ出張して居り相變らす酒の上の快談有之候ヒキ然し遊治郎の多きには閉口致候湯ハ世界第二ト稱するも他の設備ハ石川縣の何番ナルヘキヤ

(註)「、子」とは嘗て安産を欲して入院 珠の如き男兒を擧けたる甲斐もなく産褥もマダ離れやらぬ内或夜假睡の夢醒むれば兒は冷へて土の如く

あはれ悲嘆の泪にくれし裏若き夫人ふり、偶某驛にてそが夫妻の同しく和倉に赴くに出逢ひ其奇遇を稱へり、而して「早瀬氏」こは臺灣より歸りし軍醫三求氏の余に先立つ數日家族全伴同しく此處和倉にありて余が投せし室に在りし由報しまつりしに困るふり

○我邦の温泉場や夙に醜陋なる狂態を演ずるの惡風あり、絃聲耳を聳し俗謡堂を動かし安眠を妨げ其靜養を害ふを以て已か能さずか如く之か爲に保養を旨とする眞の浴客の迷惑や又以て想察すへきなり、恩師さきに之か爲に閉口し給ひしか我れ亦之か爲に願る苦しめられたるこそ苦々敷いこの限ふれ

唯今病母少しく眠ニ就ク閑を偷んで思ヒ出るまゝを筆にし遙ニ君ト對談せんと欲するのみ

廿二日燈下認

二 (十一月四日)

口 上

昨朝八時前男子分婉致候母子共に變りなく候間乍餘事御放念可被下候麥角浸二分正ニ落手仕候一昨日借用致候産科器械類御返却致候明日初生兒体重計拜借致度候尙胎盤等御送付申候間乍<sup>二字難讀</sup>○重量寸尺等御測り置き被下度願候

尙々別紙二葉可然御取斗願候實ハ小生ハ塵カナ感冒位ナレ<sup>レ</sup>子供兩人共流行性感冒にや可ナリノ發熱あり殊ニ弟ノ方ハ兩三日安眠不致如何にも手離し兼候まゝ今明兩日保養かたゝ欠勤致候間よろしく願候明日手術ノモノハ

當人に差支ナクハ御施行願候早々

(註) 天長節の晨御次男勝光様御生誕あり、御住居の長町ふるこ天長の佳節に因み勝長を御命名し給ふべきやと申上げしに、祖先に勝長公あり全名之諱むすふはち勝高とせんか勝光とせんかふと撰ひつゝ遂に老母の意に従ひ勝光とせりと申されけり

三 (十一月五日)

拜復 種々御手数ありかたく存候殊ニ御十分でなき處欠勤者にかてゝ加はて小生も亦引籠候事誠に御氣の毒の至りに御座候

聖徳餘聞 御祝キとして御惠投被下誠ニ好箇の記念永く秘藏可致候  
先へどりいそぎ右御挨拶申上度亂筆如此御座候

餘は萬縷接局の時を期し候 早々

天長節後二日

八田 雅 兄 侍史

小川 勝 陳 花押

尙々母子共健全に付乍餘事御放念可被下只長男ファミリエ間の激變に付殊ニ風邪後にて大ニ閉口實にや三尺に足らぬ童子にも志を奪ふ可らず耳順の老母も不感の父も終夜眠るを得ざる次第に御座候

(註) 「三尺に足らぬ童子も志を奪ふ可らず」この語余は恩師か屢次「五尺の丈夫も赤子に支配せらるゝこの餘儀なきよ」と申されたるを對照して  
そゝろに子煩悩ある恩師を偲ひ奉るにふん

四 (十一月六日)

拜啓 誠ニ申兼候へ共今明兩日尙欠勤致候間よろしく願候明後八日ハ村(岩井?)手術の約束には候へ共當日ハ午後

○時半々卒業證書及ヒ賞品授與式有之引キつゝき十全會茶話會開かるゝ事ニ候へは翌九日(土曜)可成は十二日(火曜)ニ致度實ハ小生(老母も同様)昨夜より感冒再感惡寒熱發も加り候まゝ右八日の式にも或ハ加りかたからん歟と被存候へは可成兩三日ヲヘタテタル來火曜日ニ延引致度事ニ御座候右患婦及ヒ家人にも可然御通話被成下度兩三日の延引ハ益アルモ害ナキ御申渡シ置被下度候右願用迄 早々

六 日 朝

五 (十一月七日)

御 返 事

麥角一日分正に受手御手数數千萬ありかたく度々御尋に預り候小生ハ思の外によろしく長男義は最早熱ハなき様子なれ共起臥の外夜外ニ二三回目さめ大叫喚大亂暴を働くにハ閉口シカモ悉く老母を煩ハす次第に付一入痛心の至り然し茲數日にてナントカ一轉可致と存候」本日の様子にてハ明日は是非登院可仕と存候」來ル日曜云云差支無之候

○后略

六 (十二月二十九日)

拜啓最早餘日も無之御煩忙恐察致候先刻は態々御使にて品々御惠投被下難有存候一同方もよろしく御禮申述候とくに當方々何か差上度と先頃より考居候に不思延引今日ニ及候不取敢別封御笑納可被下候

一吾家の歴史 日夕貴下の手譯をまつ

一新家庭訓 乍失禮令閨君ニ呈す三輪田女史は小生面識あり誠ニ希有の女丈夫其文花あり實あり時ニ有髻男子をして瞻若せしむることありまた内容を知悉せずと雖も必ずや推奨すへき價値あらんを信す

一優能美 何賀な芽出度模様もかなと探さく致候へ共不二の趣絶なる姿と松のときはなる操とに如かすと存候座右ニ呈し候

一茶盤 到來品なれ共右附屬品として呈す日用品ニ加はれなは幸甚

餘ハ春陽の節ゆるく閑談の機を得度とかさ殘申候敬具

十二月二十九日

小川 勝 陳 花押

かねて拜借致居候肉彈一と先つ御返璧致サント處々探したれども見當らず其内差出可申尙家族一同かよろしく申出候 再白

(註) 恩師が贈り給ふ品々我等がサ、ヤカふる家庭に缺くへからざるものとして日々使用し侍へることさても思出多き極かふ

## ◎ 明治四十一年

一 (三月八日)

復啓 昨夜ハ千萬御苦勞の程恐察致候九時頃まで至極平穩の様子に付他の院内患者も序ニ回診してワザト君を起さすして戻り候「留守中越野君(七時頃?)見はられ候も本日午前九—十時迄に再訪ヲ約セラレテ歸られ候由にて實ハ今迄心待ニ致居候處に案外にも鷹見君相見に間もなく貴書ニ接し候事に御座候御申越の様子にて一ト安心致候殊ニ



尿量ノ一回四百四十瓦とは不良中の佳徴ト存候用談濟次第も少シ越野君ヲマチテ登院可仕候途次佐々木君方ニ立寄ル考に御座候（昨夜は多分來ても無駄ト思テノ返事ナリシナラン）

先ハ御返事まで早々 八日午前十時スギ

八 田 兄

小 川

○唯今カキ終りし後越野君來られ候

（註）余は此書を読む毎に恩師先生を偲ふと共にまた、子を連想すること切あり、月の七日、子「ネフレチツセーウレミー」發作あり、折から森八樓上教授晚餐會あり、恩師すまはち登院診察、われ其鎮靜して平穩さふりしに及び恩師の許可を得て八時就床、十二時より曉に至る更に病を看る、恩師が昨夜は千萬御苦勞と宣ひ又「ワザト君を起さすして戻り候」とは之か爲あり、當時の宿直日記に曰く

「三月七日 午後三時四十五分、子突然痙攣發作、附添看護人驚き醫員馳せ、電報飛ひ近親急馳す、恩師部長先生亦登院、約三時間痙攣反復十有七回注射注射腸洗腸等處置に就て至らざるは最後の方法亦遺憾なし、幸に漸次安靜平穩、復痙攣發作せざるを祈る事痛切なるものあり」

「三月八日（日曜） 今日眼科の當直順あり而も、子安心するに由なし、午後先生佐々木先生と共に御登院佐々木先生親しく一診豫後の頗る疑はしきを語り沈重の態度を以て出來得る丈け諸般の状態に就き細心留意すへきを告げらる、乃ち止まつて病を診んか爲め重ねて一泊し茲に連直する事さふりぬ」

○而して越野君を心待に待たれふるは一に生が一身に關してありき、後全兄告げて曰く余や先生に接する十年未だ曾て先生の怒色を見たることなし而も此日初めて不満の語氣と不満の相貌を拜せりき、げに當時恩師の生の將來に就て幾多の注意を拂ひ拵めて其所を得せしめんを焦心し給ひたる親しく岡本氏の許に駕を任せ給ふもの數次、余は恩師が身に餘る恩情と共に岡本越野両氏が好意は深く肝銘措く能はざる所あり

二 (三月二十日)

復啓 儲、子永眠致候趣誠ニ残念の至リニ不堪候然シ至極安靜の臨終ニ有之候趣セメテの事と存候過日某僧より

聞法の事、老母より承及候其時より覺悟致居候か一昨日夕昨日ニ至る急變にハ少からず驚き候へ共今朝をもまた  
すとは實ニ人生露にたも如かすと被存候健康勝レサル君か身を以て萬事直接衝ニ當タラレタルハ生の特に感謝致す  
所ニ御座候

御申越の如く本日の開腹術にハ御遠慮可然と存候故セメテ本日丈け十分御静養可然と存候

廿日朝

尙々昨夜歸宅後國元々の一書状を見れば親戚のヨメ(三十一、二)遠逝の報ありき何物とも分かず候へ共殆ト同齡  
位の事とてサイサキ餘りよろしからず或は院にも變事あらん歟杯一寸浮ヒ申候事ニ御座候

(註) ウレミーを發し危篤の境にありし、子も該發作後病機一轉日を逐ふて快方に赴き尿中蛋白の如き急速に遞減し此分からは大丈夫と入も我も  
愁眉を開きつるに何等の不幸ヲ思懸ふくも更にエリシペラスを發し衰脱の下に玉の緒の止めん様もふく憂更に憂を重ねぬ、子や何不自由なき身の  
今一度健康に復せんことを希はるゝもの切ふりしに拘らず旬日來宗教的實感を痛切に味ひ頗る得る所あり思を死生の外に趨せ超然自適「お先へ參  
ります」の語を遺して極て安靜に永眠一しほ我等が心を引きたりき、而して恩師が故郷よりの通知に鑑み「病院にも變事あらん歟」と憂ひ給へ  
し甲斐もふく、子終に立たず、「サイサキ餘りよろしからず」と宣ひたる思帥も亦半歳を隔て、あはれ秋風と共に白雲の人となり給へぬ、我等  
は俯仰天地無限の追懷に轉た悵然たるもの久し

三 (三月廿二日)

復啓、夫人産機相催候趣態々御報知殊ニ現状の様子詳細相分り多謝々々

貴下宿直ならば小生は參らず暫らく静養可仕候尤も破水後娩出に時間かゝる歟ならば器械にても用ゐる場合ニ立到  
り候ハ、御手数難ながら尙一應御報煩し度候早々

三月廿三日十一時半過ぎ

萬一本夜中ニ再ヒ御使煩ハス場合にハ可成車夫御遣ハシ可被下候

mit Wagen

四 (四月二日)

拜復 參觀日ハ確に四月二十日の筈に御座候如何にして今迄氣付かすに居り候や不思議と思ふ位に御座候  
新聞廣告にて訂正の事に取斗可申候(多分前回ノ原稿ヲ用キシ結果訂正シタルモモトノマ、になりたるならん)  
右田中君にも御傳聲可被下候

○金澤市ノ分一括して加藤君ニ托置候もの御手数難から右ノ點御話シ置被下度願候

○尙々明朝(夕?)ハ一寸なり西上致度と存候へ共家事の都合上未だ確定不致候もし西上致候ハ、早くも六日なら  
ては歸宅致す間敷院務何分よろしく願候

(註) 第九回北陸聯合醫學會案内狀に參觀日十八日とある由田中一次郎氏より注意し來る、余直に之を庶務部長たりし恩師の許に報す折返し恩師より案内狀の裏に右の如く書して送られぬ

而して四月四日より二日間京都市會議事堂に於て第六回日本婦人科學會あり、恩師之に列せんか爲に岡田剛吉氏と同行の約ありしと聞きぬ

五 (四月五日)

(省畧)

尙々小生京都學會ニ參り度と存候處三日夕より長女不快其夜急ニ吐瀉ヲ始メ何分外出致兼候ま、明日も登院不致候尤も差したる事には無之と存候ま、御放念可被下多分明後日も登院致兼候半と存候

六 (四月十一日)

復啓

挖氏散正ニ入手仕候試験答案も同様確かに受取申候

、子いつれ難物と存候かゝる患者ハ全く一人にて若クハ數人にて一人と同資格となりて片言隻語も違ハサル様ナサ、レハ思ハヌ言葉尻リニ不信用ヲ獲ルコアルベシ

又常人ニ不必要と思ハル、ものもかゝる人ニハ必要の事もあるべし有形療法の外無形の療法も殊ニ必要あるべしと被存候(下略)

(註)「試験答案」とは産婆生のものにて、「子」は某陸軍將校の夫人にして高度の歇斯的里患者あり

○本日各首席醫員諸氏ニ大略成行御話なされ候との事他言無用とあらはよろしけれ共後日ハ兎も角最近ニ此事相分り候様ニなりては少シ工合アシキ故此點ハ特ニ再應御注意可然と存候(何レ後にハワカルコナルベシ。諸氏ハ全ク初耳なりしや否や)

○山崎先生の小生の在否を尋ねられたるは果して診斷書の件なりや先生の認メ難しといわる、事ハ萬ナカルベシト信す

貴下の御都合上かくなりては一日も早く院の關係を絶たれ度御衷情推察ニ不堪小生一箇の都合よりしてのみ女々敷一日く延ハし候義にハ無之候へとも他の諸氏は未だ全く不馴の境遇ニあり加之小生一昨日を昨日ニかけての(實ハ四月二日以来ヤスミタルハ子供の病氣に加ふるに小生も甚た健康ヲ害したればなり)模様イカニも不快にて少

クも一週日ハ静養ヲ要するならんと被存候故かた〜御難題申たる次第なりき本日ハ昨日々少しよろしけれ共未だ熱氣去らす候ま、閑居罷在候明後日はツトメテ登院致サント存候餘ハ萬縷接眉の時ニ讓る 拜具

萬々一明後月曜日正九時迄ニ登院セサレハ四年生講義ハ休ミタルヘク十時半迄ニ登院セサレハ診察始メラレ度

(貴下は御都合ニより早々御戻りなされ候ても無據候)

右あらかしめ申上置候 四月十一日夕認

(註) 思ふ昨春二月廿一日はれ余か終生忘れんとして忘るゝ能はざるの日あり日頃の直情徑行偶事に當りて迸發せし日あり、越えて三月四日恩師より電話あり、歸途來毛を待つと、難察にや保命酒お賜はりつゝ懇談五時より十一時に至る盡きんとして尽きず、御赴任以來十有数年の概勢を傾吐し併せて生か直言端かく進退を決せざるへからざるに至れる旨を告げ「我子を始末するは親の責任あり部員たる子の始末は勿論部長ある親か之を爲すを當然とす」と申されたることなど語り給ひつゝ、辞表提出期は一に之を任せよと慰撫交々臻らざるものふかりき、余や之が爲に愈益恩師が爲に一身を捧ぐべきを思ひ凡て恩師が爲し給ふ處に任かし參らせ常の如く登院執務し談論笑話また常の如し而も多年厚誼を忝ふせし各科首席醫員諸氏へ特に一言の挨拶も無く突然職を退くの禮を失するを思ひ此日初めて從來の願末を打明け不日辞表提出の旨を告げ且つ其由を恩師に報しぬ、恩師則ち這般の注意あり余更に之を諸氏に傳ふ、三木三郎氏總代として十三日夜先生を訪ひ對談後恩師には右側胸部下方に一小部不快の鈍痛を覺え殊に咳嗽時に幾分著しく感し多少促進を覺え給ひたるは嘗て岡本氏に病狀を報せられし消息に記るし給ふか如し(本誌第五十一號附録七―八頁消息第一參照)

七 (四月十三日)

拜啓 君は俗塵ヲ洗ふて去ル歟生ハ永久君ト手を斷タサルベシ

十三日 八 田 君

小 川

(註) 一語簡ふりこ難露々たる恩情の深厚ある言はんと欲して言ふ處を知らざるあり

八 (四月十四日)

拜啓 先刻幸便ニマカセ一封差出申候御入手と存候唯今御使被下難有存候

八田君午後登院ニ候ハ、何レ診斷書入手ノこと存候まゝ別封高安院長宛ノ開封セル方ニ診斷書ヲ封入シ小封ノ方ト共ニ御差出可被下候

別紙届書ノ如ク向フ三日間靜養仕度此際欠席ハ誠ニ心苦く候へとも金曜の手術日(一人と存候都合ニより延ハしてもよろしと存候へ共随分マタセタル故可成ヤリタシ)と校長廿年の祝典ニハ是非出席致度諸君共互ニよろしく願候先日ハ公休ヲ利用シ加養致候處八九日兩日歸宅後都合あしく己ムナク十、十一日欠勤加養十二日ノ日曜も終日家居致候結果昨朝ハ全く十分ニハアラネトモ餘りの欠席も心苦くと存し登院致候處昨夕歸宅後非常ニ不快ニ感し直ニ就褥致候事ニ御座候ドーモインフルエンサの再發にあらすやと被考候

産婆生參り候ハ、いつもの通り實習(第二ノ外來及ヒ Frei 妊婦ノ診察御指圖可被下候]

○八田君ニ白す衛生會の成績小生分も出來候へとも未だ悉皆の整理付き不申候まゝ本日中午(報告)下書致度と存し候或ハ貴下の清書ヲ乞ハンカト存候明日も小使ニヒル頃ニ參リテモラヒ度候まゝ其節御届申スヘキ歟

○(后畧)

(註) 右は醫局宛のものなり、頃來恩師には、不明の發熱に惱ませられ、春期休暇を幸ひ引續き休養し給ふも、奈何せん公私内外に亙る大小幾多の事情は、十分の御靜養を許さず、劇目も回さんほどに及ひ止むらく苦痛を忍び、病軀を推して出院治を施し事を整ひ給へり、我等は岡本氏に致されたる消息と相對照して如何に恩師が胸中獨り忍び難きを忍び人知れず多大の憂苦に沈ませ給ひしかを偲び深痛の情云ひ知れぬ涙に暮るゝものなり

九 (四月十四日)

口 上

静養中誰レニモ會ハヌつもりなれ共貴下若し御用アラハ御出被下候てもよろし乍失禮病褥ニテ御目ニかふるかもし  
れず昨日、氏の事ハ如何なりしか明日小使參候節書中にて伺候てもよろしく候

十 (四月十五日)

口 上

(前畧)小生本日ハ昨日よりよろしけれ共此分ならば十八日にハ一寸なりとも参り度と存候尙來週火曜日の全宮摘出  
術も大抵ナラハ遂行致度と存候故其節是非御登院ヲ煩シ度(辭令御受取前ナラハ公然萬一其後ナラハ特別に!)右  
幸便にまかせ申進候

小 川 生

(註) 十八日は高安博士在職二十年祝賀會の濟々堂に於て擧げられたる日ふり翌十九日第九區北陸聯合醫會あり廿日を以て各病院監獄等の參觀日と  
ふす、余は恩師並に宮田先生等に尾して清壯ある新築金澤監獄を參觀し醫局に歸りて改めて恩師より十八日附の辭令を受領し翌廿一日恩師の旨に  
從ひ腔式子宮全摘出術に加はりぬ、是れぞ余が金澤病院を去リアカヌ別れを恩師に告げたる最終の日ふりき

十一 (四月十七日)

復啓

○新聞とはかき正ニ入手致候

○小泉君當地にや果た富山行にや自身若くハ家族中の病氣にや

○鷹見君々ハ先日々話し聞置ケリ廿四日ニハ歸院シタシト申居レリ

○右等の次第にては貴下ニ對しても甚た御氣の毒ニ御座候明日ハ御申越の様にて可然と存候

○一昨日御尋を受け候節より大分氣分快く例のイヤナイタミも消失致候様ナレトナントナクいやな氣分にて本日ハ

午後よりにも顔出し致度と存候へ共アテナラズ候本日手術の用意有之候ハ、猶よなく御願申候  
最早熱ハアリません御放念可被下候

○明日ハ講義ナケレハ十時頃登院入院丈け見て(新患ト)午後濟々堂ニ參りたくと存居候

○雪折ハなけれど枯るゝ柳かな

誠ニ同情ニ不堪候まさか寢耳に水とは思ハさりき然しこれにはミもあり蓋もあることならん

(註) 余が辞表呈出の旨初めて醫局全僚諸子へ披露するや小泉永宣君にはいたく驚かれたる風あり、其後全君には悲觀的一種幽鬱の狀ありしが我等

が恩師を野外に送りたる涙のマジ乾く暇もなく君亦白玉樓中の人さふれりぞ傳承しいごご人生の測るべからざるを嘆せしこそ嗚呼夫れ幾許ぞや

○而して恩師か不明なる發熱の一進一退せしあとや之を以て推し奉るべく、又「雪折云云」の句の如き以て某氏休職に就ての全情を察すべし

### 別の用事

電話 335 (?)

○昨日前かねて懇意にする横安江町の福田繁榮氏(小生來任當時の家主) 來宅候故取敢へす貴下の家ニ相應の處ナキヤ問合候處高岡町(新キ門ニテ村田トアル由)——東西南北ト方角ヲ記ルシ分リ易ク示シ給ヘル地圖アルモ畧ス——右家ニハ戸主ハ他國ニアルカ老夫婦(六七十ト)ト其孫ノ十四才ノ小學校生徒一人ノミの由にて二階(八疊六疊四疊位?其外アマノ様ノ處アルカ?)を、、、、にてかす由先頃迄六拾聯隊ノ某中尉夫婦にてかり居たりと家人ノ居間ヲ通らすして二階ニ往復出來ル由二階トいふハ少し不都合ナレト唯場所か君ニキケルト一致スレハ少しセマカラ



ンガトニかく一見してハ如何ゆかる時は「末寺前ノ福田より聞キタルガ」と前口上してゆかるべし快く見すへしとなり右一寸乍序

他諸君にもよろしく願候

(註) 此別の用事「云云の如き一抹省略せんと思ひしかど何呉レと云ふ氣付かせ給ふ恩情のいと嬉しく思出の料にまでかくは掲げつ、見ん人乞ふ之を恕せよ

十二 (四月廿四日)

拜啓過日は御疲勞の事と恐察致候其後患者も多少の苦痛ハ有之候へ共今日迄無熱幾分脈搏疾數ニハ候へとも大丈夫の事と被推候

○衛生會卒業證書授與式の時日當方よりは今週土曜日ト提議致候へ共警務長(副會頭)始メ山上幹事も差支有之との事にて廿九日午後二時々と昨夕決定致候卒業生等には午後一時々參る様申傳置候左様御承引被下度右式結了後かねて御預り置候辭職願ハ差出可申候

尙々唯今病院ノ速成看護婦の授與式廿七日(月)午後二時々舉行の事聞知致候就而は同日の方却て都合よろしからんと〇〇一交渉致して見んと存候若し別段御沙汰不致候ハ、廿九日ト御承知可被下候(ソレ迄ニ接眉の期モアレド)

福岡婦人科山添(?)氏々のはかきに貴兄にもよろしくと有之候

廿四日朝

八 田 兄

小 川 生

十三 (四月廿六日)

復啓御疲勞の段恐察仕候尙令閨君御就尋との事一入御困難の段恐察ニ不堪候實ハ先刻米田氏方より電話の傳言アリ  
タレモ餘リニ漠然タル故自分參り通話致候て大要相分り候仰の如く、家族ハ再三の説諭も承服不致候故「センロ  
術」の外無之然シ本日、君當直の由故未だ不馴レト存シ貴下を煩し度、迄電話致候事ニ御座候御申越の次第に  
てハ御尤の事故十分御静養可被成就而ハ別紙鷺山君ニ贈り度番地等不明に付御書キ添に願候也尙々令閨君も御大切  
ニ可被成候(話の様子にていつれ明朝ならずとも被存候)

廿六日夜十時

八 田 君

小 川 拜

(註) 右は骨盤狭小にして産機の模様により人工的分娩を遂げしめん?の内讒ありし入院妊婦のいよ、陣痛發作し來れるに當り小生に登院之を診  
よと申越されたるものあり

十四 (五月一日)

口 上

一金、也

右本日衛生會より送付相成候まゝ便宜上代印にて受取以使御轉送申候御入手被下度候

五月一日

八 田 講 師 殿

産婆看護婦講習所 小 川 勝 陳

○昨日は不圖金城病院にて御目ニかゝり候へ共御準備かた、御多用ども存し唯藤井山田兩君に小生婆心を申述候

こと、致候まゝ他の諸君にも御會ひ不申退出致候兩君並ニ他の諸氏にも可然御鳳聲〇〇〇三字難讀

○増築も中々廣大の御様子後來大ニ有望の事と私かに悦居候事ニ御座候本日の初陣敵幾人!?なりしや不足なきものもありしや敢問

即興

兼六の花も尋ねで春くれぬ

讀號外有感

常盤なる松島艦も仇なれや

碎けて沈む世とは知らずや

(註) 余は五月一日が金城療病院に入りて恩師が所謂「初陣」から診察を開始せり、恩師が温情の露々たる稔として春風の如くふるは眞に謝する處を知らざるあり  
而して「即興」云云、此句此歌、余は黙誦幾遍々、轉た暗涙の雙眸に充つるを覺ゆるなり、思へ僅に過日を経たる五月七日は眞に霹靂一聲杜鵑血に啼くの思ひ給ひし事を

十五 (六月廿二日)

毎々令夫人御手づから御珍らしき花卉御持參被下誠に感謝の至りに存候」又一昨夕は貴下態々神戸よりのばななど山形産とかの櫻實誠に珍らしく拜見致候彼國はいざしらす内地のものにて簡程の大サのものは初めてに御座候唯口之を嘗ムルヲ得ザルヲ遺憾と存候のみ 拜具

背面の達磨見に来よ五月晴

但し岡本氏と打合せ御出の方一番都合よろしく候

令夫人の持參し給ひしタイサンボク(?)ノ第二の花咲きぬ或日看護婦其フルキ花辨を取り去らんとしければ之を押  
止めて

萎れたる花瓣さねも残し置くは

人の心の情なるべし

右に付人生の榮枯を説き病中ヨケイな駄辯を弄したり呵々 六月廿二日午後飯後

八 田 雅 契 机 下 (本日宿便を浣出して快甚し)

(註) 右は小生へ賜はりたる最後の書信にして第五十一號誌上其「病床餘瀝」の最後に掲げたるか如し、當時恩師には既に褥瘡の發生を見羸瘦眞に  
骨と皮ばかりにあらせ給ひ褪せりゆく大山人の花のその如くなりき、而してこぼフト思浮ばせ給ふまゝ鉛筆執りて記るさせ給ひ早くこいつ  
にふく急がせられ、折から使丁中村の歸るに任せ小生の許へ届けしめ給へるものふりき後にて附添看護婦より聞きぬ 噫 (完)

附

恩師や夙に興に乗して筆を呼ひ其書籍と器物たるを問はず心の越く所に従ひ時に之を馳するの習あり、爲に往々意外ふる物に於て其墨痕を認め思はず  
「是ある哉」と嘆稱すること妙からず

恩師には御令息御令嬢等御生誕の慶ある毎に産湯召す浴槽を新調するを例とし且つ槽底に記念として壽の辭を記るすを常とし給ひしか如し、かれて此等  
の浴槽と共に米櫃にも何か記るさせ給ふ由傳聞する處あり、すなはち恐るゝ御遠族各位の御承諾を得試に就て見奉るに實に左の如きものあり、左も御  
令嬢のものに既にいたく破損したるより修復すべく板を打附たりさて其墨跡を尋ぬるに由ふかりしは最も遺憾とせし處あるも他の御令息並に多年使用し  
給へる米櫃は見る者をして云ひ知れぬ心知に袖濡らさしむるこそ誠に懐かしの至りふれ

御令息勝利様の浴槽(盥まり)は三足圓形のものより其底に曰く

明治卅七年 甲辰 五月吉日

下總 結城 小川 氏



初老加賀臥龍麓

晚春重祝麻涯邊

樂山堂主人題

御次男勝元様のものは四足小判形にして其底に曰く

明治四十年丁未九月十四日 (陰曆八月七日) 出來

金澤市長町一番丁五番地

下總 結城 小川

來月生るべき子のうふ湯に使はんとてつくりければ

龜の子にたる小判の桶なれば

長命富貴の子供をたてよ

美津の屋主人

而して、米櫃は約三尺に二尺位の長方形のものにして其蓋の裏には上方に「向フ向キノ立チタル馬」を「コチラ向キノ立チタル羊」とを  
書き更に下方には「向フ向キノ臥牛」を書き給ひ、此鼎足狀なる圖の左側には

粒々皆辛苦

新米や一粒つゝに汗之玉

東海

と大書し給ふ、御隠居様の申さるゝ處によれば「午は父にして未は私丑は勝陳」なり云云

又内面には右に「入日なす西町去りて卯辰山」左に「見ゆる味噌藏まちに來にけり　み津の屋主人」と書し、其外後面には

「世の中は何につけてもとはいふもの、油斷大敵米のめし　乙未五月初旬　臥牛生」

とあり、而して外底面には更に

明治廿八年五月八日製

壽

金澤市味噌藏町下中町九十一番地ノ一寄留

下總結城　小川氏所有



と記るさせ給ふ、傳へ聞く恩師には廿七年御赴任の際初めて西町尾崎神社の邊に居をトし給ふこと數月、去つて味噌藏町下中丁に移り兩三年の後更に全町片原に轉し八年の久しき此處に居ませり、而して新築病院の成るや下本多町六番丁金澤電気會社向に轉し、今の本多男爵邸の新に築かれし一部より越えて一年長町一番丁ふる今の邸宅を購ひ移り給へるものあり云ふ

○恩師の記るさせ給ふ感興や尙他に多くのものあらんも今之を捜求せんか爲にあるは古き日記を繙きあるは幾多の書籍を尋れんことを願ひ奉るの甚だ冷酷に失し反て御遺族各位の感情を害ひ不快の念を起させ給ふ恐ふきを憂ひ、「見タシ」の念頗る胸中に蟠るも進んで之を舌頭に顯すことの更に勇氣なきは大に讀者諸彦の偏に諒察せられんことを希ふ處より只恩師が特別會員として將た雜誌部長として嘗て本誌漫錄欄に掲げられたる隨筆阿三あり、當時恩師か筆に成りしを能く知悉せし者果して幾人かある、乃ち採て以て其風望を偲ふへく更に爰に之を録す、續者願くは之を咎めずして可也

# ○餘白點玄

(明治卅一年六月十二日)  
發行本誌第六號

未會藏生

餘白點玄 何也曰、讀如字、文不爲章、辭不作句、蛇行鳥跡、蟹步龜體、隨感隨筆、從吾所好、之自適處、雜然駁然、無稽不羈、飄乎漠乎、如風似雲、活殺編者在、取金看官存

未會藏生 是は誰ぞ、曰未た其姓氏を明にせず、唯其已れに収むる所、未た會て藏せざるを以ての故に、暫く自ら名くと云ふ

○從吾作古 *Nur der Meister kann die Form zerbrechen.*

生每誦斯語、常思斯語、嗚呼徒誦而已、空思而已、！作古易、爲作古吾難耳、*From zerbrechen leicht, nur schwer Meister werden!* 豈然らんや

○吾不信 人は萬物の靈と、異口唱し同音和す、東海然り西洋然り、古往然り、今來亦又然り、果して然る歟、もとは自稱のみ、自贊のみ、何ぞ信するに足らむ、謂らく、人は人より不靈なる物より靈なるのみ、宇宙豈人より靈なるものなからむや、人豈己より、靈なるものあるなきを知らむや

○微笑大喝 吾一日與僧談、渠問汝學○乎、曰、然、又問、汝究○○乎、曰、然、渠突如曰、牝牡何如殊、生吟曰、未聽隻手聲、豈識兩性別、渠微笑曰、孺子可教、他日渠徐問、汝知佛乎、曰、否、他日又問、汝好佛乎、曰、否、他日又問、汝樂佛乎、曰、否、他日又問、汝信佛乎、生對曰、否、吾信於佛者也、吾疑

於佛者也、吾欲知佛者也、知而欲好吾所好者也、好而欲樂吾所樂者也、樂而欲信吾所信者也、否、吾欲知吾所信、吾所樂、吾所好、能合佛否者也耳、渠大喝曰、無緣難度

○批評豈易乎哉 世に批評を好む者あり、漫に批し妄に

評す、批評豈易乎哉、批とは何ぞ、批字從手從比、手相比也、評とは何ぞ、評字從言從平、言平也、批評豈易乎哉、夫れ批評者の批評者は批評者の被評者のみ、被評者の被評者に非る也、批評者眼底の虚像のみ、被評者腦裏の實相に非る也、凡そ批評者は先づ自ら被評者たる可し、被評者たらざる可からず、批評者は被評者と其才と學と識とを等ふすへし、等しからざる可からず、等ふせざる可からず、其時と處と位とを同ふすへし、同しからざる可からず、同ふせざる可からず、それ然り、批評者は被評者と一體にして分身にして而も虚心にして平氣にして始めて批評し得べきのみ、批評豈易乎哉、世の所謂批評は我所謂批評に非る也、世の批評は漫也、妄也、批評に非る也、批評豈易乎哉、生は毎に批評者の批評を以て批評者の何如に被評者を觀るかに察て以て批評者を批評する者也、いな、私かに彼一斑を批評せんと嘗むる者也、然り、然りと雖も是我觀る一斑のみ、彼有する一斑には非ず、假令我一斑、即彼一斑也とするも是一斑のみ、全豹には非ず、一斑以て全豹を推すへしとするも是推するのみ、全豹

を視たるには非る也、吾豈敢てよく批評すと言はむ、批評豈易乎哉、批評は固に難い哉

○南木藤艸 吾讀國史、每至延元建武、輒謂、正成身死而心尙生者也、藤房身存而心既亡者也歟、今世藤房希有、正成絶無、吾悲正成之心、哀藤房之身者也……

吉野山花まつ頃の朝な〜

心にかゝる峰の白雲

借以遙寄懷同人

明治卅一年第三學期始業第一日於○○客舍病褥

## ○漫々録

(明治三十一年十一月八日發行本誌第七號)

點 玄 道 人

編輯嘗て吾に約するに餘白數項の愛を割くを以てす頃る雨師喜少ふして硯池殆と潤る秃筆を洗ふに由ふし雜感二三僅に責を塞ぐと云爾

○吉野山去年の枝折の道かへて

未だ見ぬ方の花を尋ねむ

これ予が新學年に入る毎に輒ち三唱する所ある新學年赤帝遠く去て炎威日に衰へ白雲飛ひ來て時漸く搖落に近からむとす而もこれ吾人學徒の春ならずや來れ吾黨路を何處にとらむかな、やよ小子杖な忘れそ草鞋いかに、未だ見ぬ方の花いつれ、然りと雖も吾人豈嘗に其果

を眺むるのみを以て足れりとす可けんや竟によく其花を穫すして息む可ざる也

○不可思議 宇宙もと不可思議なし不可思議ある容さす若しありとする者はこれ盡きるなり吾與るさす不可思議はそれ未可思議なるへきのみ宇宙遂に不可思議あるへからざる也

○廢物利用 世人趣もすれば得々口を開て曰廢物利用と予謂らく利用せらるへきものは廢物ならずと非歟世よく此言を解する者鮮矣否斯事を行ふ者なし蓋有之矣我未之見也

○追二兎者不獲一兎 然り固に然りと雖もこれ時を同ふしてのみ若夫れ時を異にせんか一兎を穫て而後また一兎、二兎よりして三兎、十百千兎と雖も亦穫易からむのみ予は今の世一兎を追ふの心を以て二兎を追ふの事を勸むるものなり否百千兎を穫るを敢てせんと欲する者也

## ○自嘲

鳥羽玉の黑白もわかぬ闇の夜を

たもしろしとや鼻なくなり





知り得べし他人の忖度恐く先生を害はむ贅せざる所以なり

○先生去る先生今や幽谷より出て、喬木に遷る縉纒たる黃鳥遂に丘隅に止らざるか

○先生去る先生既に崑山を跋て巨阨に在り先生健脚險峻何か有らむ

○先生去る先生去て北地春尙寒し借問す南中の先生夢温きや否や

○先生去る先生去て冀北の野馬群遂に空し馬なきに非ず良馬なきなり否往年池月を産せるの地今日豈龍馱なからむや唯恐る伯樂ありやなしや

○先生去る先生校院に盡瘁する二十年所久しと謂ふ可し然り久しと謂つ可し然れども尙久きもの之れ無きにあらず唯先生の如く久くして先生の如く遂に去る者はあらざるなり是れ殊に恨む可しとなす嗚呼校院幾多の國手 Therapeutik なかりしか抑も Prophylax なかりしか

○先生去る先生去るに臨て詳かに前任上長の功を彰し次て下僚某々の姓名を挙げ特に其績を表す曰く上長の功は顯れ易きも下僚の績は埋れ易しと眞箇に然り眞箇に然り上長たるもの斯心なくして可ならむや一將功成萬骨枯とは古來よりの恨事先生はよく枯骨をして餘榮あらしむる者と謂つし

○先生去る先生の去る去るの日に去るにあらざるなり先生の去る遠く官遊の前にありしなり近く復歸の後にありしなり爾來先生は捲土重來の勢を以て院に校に大聲せり縣に省に疾呼せり院の新營せらる、校の改築せられむとする實に其反響の一なるなり世の近眼者流之を是れ辨せずして妄りに先生を議す思はざること甚しと謂ふへし先生は去就を以て校院に盡竭するの心力を二三にする者に非ざるなり

○先生去る先生去て校院博士なし博士なきに非ず博士なきなり博士なきは愛むに足らず先生なき實に惜むべきなり

○先生去る先生は去るを以て去るにあらざるなり去らざるを以て去れるなり心事亦悲む可らずや校院にして省なく縣省にして戒むるなくむば先生遂に去らむなり校院たるもの縣省たるもの三たび思を致して可なり

○先生去る人皆去ると言ふ人は先生在らざるを以て去れりと謂ふ是れ忘恩者のみ有象の先生は在らず而も無形の先生は在り校に在り院に在り市に在り郡に在り將た縣に在り國に在るなり世間幾多の小「先生」勤めて以て大々「先生」となれ是れ蓋し先生の意なり抑亦先生の徳に報ゆる所以なり

○先生去る先生の風は山高く水長し山は峨々として雲際

に聳ゆ水は混々として晝夜を舍めず山は千秋不動なるも  
水は刻々流れ去るを如何せむ歎するを休めよ吾黨の小子  
河川の流江海の水再ひ雨露となりて吾人に來らむ三たび  
霜雪となりて吾人に來らむ先生遂に去らざるなり

○先生去る「先生去」幾則豈道人胸中の先生を盡くすと言  
はむや何ぞ況や先生腦裏の先生をや唯先生を叫喚する幾  
十百回するものは微く先生を恨めばなり大に先生を惜め  
ばなり然れどもこれ豈獨り先生を惜むのみにして止らむ  
や……………

草色青青柳色黃

桃花歷亂李花香

春風不爲吹愁去

春日偏能惹恨長

### ○塵土集

黠玄道人

次池田君韻

歲月日新日又新 不勤拂拭萬古塵 雨中初作金城客 雪  
裏幾逢麗澤春 十年靜座觀無字 百里遠遊忘赤貧 失笑  
先生不惑父 起居尙勞耳順親

贈湯目教授

塵埃堪絕臥龍雪 名利暫忘兼六花 莫逆舊人須再顧 松  
杉高處是吾家

### 逸題

三十餘年難拂塵 何緣今日遇佳辰 臥龍山上雪中客 浴  
得洗心庵裏春

步劍虹生韻 生未見友在西藏

四十無聞吾將老 空拳欲拂滿身塵 朔風夢破書窓下 遙  
思遠征千里人

塵世有無中 何倫窮與通 醫王頭尙白 犀水渡春風

寄土肥驪軒

波山踏綠蘚 霞浦濯紅塵 回憶會遊跡 孤燈殘夢新

因云愚脚には詩文歌句等各場合に應しいろくの雅號を用ゐられたり、點玄道人、玄々道人、東海、臥牛、臥牛庵主人、美津の屋主人、宋會藏生、細流子、餘白先生、餘白子ふど我等の知る處のみにても既に此の如し

### ○嗚呼關屋林之助氏

(明治四十年四月十六日發行 本誌第四拾四四拾五號合冊)

富貴は浮雲の如く榮枯は夢の如く、昨日は衰へ今日は榮  
ゆ、たゞ梢の花草の露の如し、されど芳名のみは天地のあ  
らん限りは書にもかゝれ、人にも云ひ傳へられて實にめ  
でたきものなり、當校卒業生の一人なる關屋林之助氏は  
その類になむ

氏は石川縣鹿島郡崎山村の人、幼にして大志あり、夙に第

四高等學校醫學部を卒業し、爾來研鑽或は病院に或は公職に盡碎し、大に爲す所あらんとせしも一朝二豎のため、常とはに其姿を地上に消して白玉樓中の人となりぬ悲しい哉

葬儀は一月二十日郷里崎山村に營まれ本校有志、石川縣第四部及び金澤病院職員有志より香奠として金若干を贈られたる由  
左に全氏の行を銘して氏の幽魂を吊ふ(下畧)

恩師長逝し給ふや御遺族より片身として我等門下生に恩師の遺書の数許を頒たる、余「Das Weib」を頂き更に日本産科叢書、開國五十年史の謄與を受く、中に本誌原稿用紙に認められたる年経たるもの二葉あり、不満無魯句と題せられ未定稿なり、思ふに恩師の本誌に掲ぐべく録せられたるものゝ如し、今之を私するに忍びざるまゝ併せて掲ぐるこゝせり

### ○不満無魯句 餘白子

あゝ醫者カ!? コレ非醫者ノ聲也衆人ノ心也輕侮ノ影也

御先生様——コレ此三段ノ敬稱ヲ受クル者ハ誰ゾ  
村落

田舎ノ醫ニアラスヤ願テ都市ノハ如何博士モ勅任官モ所謂大家モ皆呼捨テ也一ノ敬稱ダモナキナリ臣僕ノ如キナリ嗚呼コレ誰ノ答ゾ他ノ無智モアラム誤解モアラム自ツ超然モアラム

○大官小吏 疊語 Minister 卿長官ト翻シ大臣ト譯ス當レ

リ然カモ原 Minus ヨリ來リ小人微官賤吏ノ義ナリ、コレ帝王ニ對シテノ意ナラム、反之 Meister, magister 師匠、先生ハ Magnus ヨリ轉シ大人ノ義、コレ生徒(小兒)兒童ニ對セルモノカ然カモ予ハ信ス Meister Magister 共ニ其原字ノ如ク Mi ノ小ニシテ Ma ノ大ナルヲ Belativ ニ於テモ Absolut<sup>ニ</sup>於テモ、日ヲ同フシテ論スルモ予ハカク確信スル者也  
○時艱而思偉人 不思偉人念誠者、偉人常無誠者豈無哉  
○醫 ハソレ大俗ニシテ大真ナルモノカヨク此兩語ヲ辨スル者ヨク良醫タルヘキ歟

○世にへなばよしなき雲もたほひなん

いざ入りてまじ山の端の月

自殺者ノ觀念概テ此ノ如キカ猶リ鳥井與七カ妻ノミニハアラジ然レモ汝カ入ラントスル山ノあなたニモ亦雲アルヲ知ラサルカ思ハサルコト甚シト謂フ可シ  
其情ヤ憫ムヘシ其愚ヤ及フ可ラサルナリ

○大非

○豈好辨哉 多クハ是レ辨ヲ好ムモノ、言

○Der Mensch bleibt wer er ist, und ist doch mit jedem Tage ein anderer.

コレ先ツ吾意ヲ護タリ人實ニ此ノ如クシテ而シテ人自ラ此ノ如キヲ知ラサルナリ

○第五十五號附錄正誤

頁	行	正	誤
一	一四	恩師	恩師
二	五	恩師	恩師
四	八	少ふくとも	少もふくとも
一〇	二	患者として取扱	患者とし墮取扱
二七	一五	氣品自ち高雅にして性行自ら皎潔	氣品自ら飲高雅にして性行自ら潔
三〇	四	宿痾	宿痾
三〇	三	御覽の通	御の覽通
三〇	一二	遺聞	遺聞

○本號附錄正誤

頁	行	正	誤
一	一六	而して	、して
四	一二	偶語	偶語
五	六	盡日尋春	尺日尋春
六	二	night	night
六	八	點のふるきは	點のふるまは
六	一一	佐々成政	佐々木成政
六	一三	「道迷ふ暮れゆく春の旅鳥」を「迷ひけり暮れゆく春の旅鳥」と正し給ひの十三字脱	
六	一五	由來半身	由來半身
六	一六	戸外雨蕭々	戸外雨蕭々
七	一四	長途旅行	長途旅餘
九	七	南北病棟	南北齊棟
一一	一五	湧く浦よりの	湧く浦上りの
一一	一五	困居候	困居候
一二	一	健康を贏ち	健康を贏ち
一三	一八	、夫妻の入浴	、夫妻の入浴
一五	三	名之を諱む	名之諱
一五	一〇	萬總接眉	萬總接眉
一五	一三	不惑の父	不惑の父
一六	一四	奪ふべからず	奪ふべからず
一六	一七	貴下の手澤	貴下の手澤
一八	七	曉に至りて	曉に至る
二八	一二	思ひ給ひ	思ひ給ひ
二九	一五	尤も	左も
三六	七	何論竊興通	何論竊興通
三六	一二	餘白子の下樂山堂主人の五字を脱す	

因云

恩師先生半身銅像は御一周忌即ち昨秋九月十六日を以て金澤病院前庭に之を假設し肖像額は舊臘其作製を待て學校病院及御遺族に各之を寄贈せり其會計報告と醜金芳名とは本號誌上に於て銅像寫真と共に掲ぐべき豫定の處事志と違ひ當事者中偶病床に伏するあり他に旅行するあり加ふるに芳名者中尙醜金の達せざる向あり彼此錯行爲に會合處理の機を失し遂に本號切期限迄に其書類を取纏むるを得ず止むなく銅像寫真のみを巻頭に掲ぐるに至れり其罪全く當事者に在り爰に不取敢事の由を陳へて大方諸彦に謝し次號に於て之か報告を怠らざらん事を期す

明治庚戌紀元節

八 田 智 証 敬 白